

黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通

Turquoise Ornaments in Ancient China

秦小麗
Xiaoli Qin

黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通

秦小麗

(金沢大学国際文化資源学研究中心)

はじめに

トルコ石がいつの頃から人々の装飾品として利用され始めたのかはよく分かっていないが、考古資料をみると、古代中国ではBC7000年ごろの新石器時代前期に始まり、黄河流域を中心として、単純なトルコ石の垂飾品が出現している。特に、黄河中流域の賈湖遺跡の墓からは、大量のトルコ石珠が副葬される特殊な現象がみられ、人々の注目を集めた。初期青銅器時代以前では、威信財として儀礼の象徴となって権力者の墓を中心に玉石器が副葬される。そして、黄河中流域の考古学文化では、東北地区の興隆窪-紅山文化、長江下流域地区の河姆渡-馬家浜-崧沢-良渚文化、および長江中流域地区の大溪-屈家嶺-石家河文化や江淮一帯の蔚遲寺-凌家灘文化といった大量の精美な玉石器が出土する著名な文化とは一線を画し、玉石製の祭祀遺物は大変少ない。また、山西省南部の清涼寺墓地¹や黄河下流域の大汶口文化といった大量の玉石器を副葬する特殊な遺跡があるものの、一般的に遺跡から出土する玉石器は少量である。そして、新石器時代前・中期を通して、黄河上・中流域では、祭祀的な性格をもった大量の玉石器を副葬する現象はみられない。しかし、新石器時代後期になり、周辺の玉石器が顕著であった考古学文化が、さまざまな要因で衰退或いは消滅すると、中原地区を主要な地域とする黄河流域では、さまざまな系統の玉石器を利用する現象が出現する。例えば、山西省南部の陶寺遺跡や下靳遺跡、陝北地域の石峁遺跡、新華

遺跡や芦山峁遺跡、西北地区の齐家文化諸遺跡などが挙げられる。トルコ石は玉器の一種ではあるものの、その特殊な自然条件下において成立するもので、新石器時代においては、祭祀の象徴として上位階層で大量に利用される玉器とは異なり、かなり早い時期に出現するが、賈湖遺跡を除き、ほとんどの遺跡での出土量は少なく、人々の関心を集めるまでには至らなかった。二里頭遺跡を代表とする二里頭文化になると、考古学的発掘調査でトルコ石が象嵌された青銅牌飾が3点出土し、更に二里頭遺跡の宮殿遺構南部からトルコ石の製作工房が発見されたことで、ようやく長きにわたり玉石器の脇に追いやられていたトルコ石が、如何にして二里頭文化を代表とする上位階層に重用されるようになり、また、どのようにしてこの中心的な遺跡で突如出現したのか、というように研究者達の注目を集めはじめたのである。

新石器時代の西北地区では、齐家文化以前は玉器の副葬は彩陶ほど顕著ではないものの、特に馬家窯文化以降の考古学文化においては、墓の副葬品として、骨製品、海貝や淡水貝のほか、トルコ石も一般的であった。こうした伝統がいつ頃から始まったかを辿ることは難しく、また絶対年代が不明確な前提で地域間の前後関係を比較することは大変困難である。但し、トルコ石がこの地域において意義あるものであり、また、社会的意義が内在する製作技術や原料の認識の差異として地域間比較することには影響しない。西北地区の馬家窯文化に始まり、玉器にかわり、威信財など身分や唯美的物質として表現されるものとして、発達した骨器加工やトルコ石製品のほか、海貝や淡水貝類も加わり、樹

¹ 山西省考古研究所 運城市文物工作站、芮城县旅游文物局編著 薛新明主編『清涼寺史前墓地』文物出版社 2016年

脂類ちった液体を用いた粘着剤があり、異なる色の原料を組合せて色彩上の審美性を可能な限り表現する。この点においては、長江流域で発達した玉器を重視する社会審美観とは異なる。そして、多くの碎片と微小なトルコ石は、自然の属性とこの種の審美観が合わさったものであり、粘着剤はすなわち、それらを繋ぐ鍵となる原料であり、ここに象嵌技術が誕生する所以となる。

本研究課題に切り込む鍵としては、大きく二つの部分からなる。それは、トルコ石の装飾品と象嵌技術および原料の産地、技術加工と流通および社会的意義である。そのため、ここでは、まず新石器時代のトルコ石製品と象嵌技術の研究を行い、次に初期青銅時代のトルコ石と象嵌技術を中心に分析研究を進めていく。

第一章 国内外のトルコ石および象嵌技術に関する研究

1. トルコ石の自然特性と象嵌技術の特徴

科学的には、トルコ石は一般的に銅を含む地表水とアルミニウムとリンを含んだ岩石が互いに化合し合って生成されたと考えられており、多くが他の岩石を伴っており、トルコ石だけで構成されている鉱石は極めて少なく、産地も限られている。また、トルコ石は砂漠地帯で生成される鉱石であり、砂漠の気候とトルコ石の生成過程には大きな関係があるという研究者もいる。つまり、砂漠は雨水の蒸発が極めてはやく、河川や地下水脈が形成しづらい。雨水は濃縮して砂漠に溜まり易く、アルミニウム含量が豊富な長石やアパタイトの鉱床、動物骨などは、銅鉱床から豊富な養分を吸収することが出来る。これらの条件が整っている場所は、トルコ石の発見が多い。そのため、トルコ石の多くは、砂石が固化する隙間に薄く細かな原石の塊として僅かに生長したものであり、大型で重厚なトルコ石は希少である。このことは、トルコ石が軟玉などを用いた玉製品といった技術に不向きであり、トルコ石との色彩の艶やかさを利用することによって、人々の注目を引きやすい特徴と関係がある。つまり、多くの象嵌装飾品はすべてトルコ石と他の素材との色彩の対比に重きを置いているのである。トルコ石の色が主に銅と鉄の含有量によって決定されるという研究によると、銅含有量が多いと青くなり、鉄の含有量が多いと緑となる。トルコ石のこのような艶やかな色の特徴と象嵌技術は、色彩対比の要求に符合していることも原因のひとつであろう。

いわゆる象嵌技術は、一種の細かな粒状或いは片状のものを嵌め込み、大きな装飾技術にまとめるものを指し、この種の技術の特出すべきことは、器物の主体的な紋様となり、異なる色彩を通じて、全体を渾然一体の複合的な工芸品として表現する処にある。これは、二種類の或いは複数種の異なる形状と色彩の組み合わせを通じて、特有な視覚的芸術効果を得るものである。考古発掘資料では、中国古代の象嵌技術の大部分が新石器時代の中後期に出現しており、

象嵌用の主体と客体の素材は骨材を主として、各種の異なる素材を組み合わせている。

以上のトルコ石の自然属性と製作技術の特殊性とを基に、トルコ石装飾品の研究はその装飾品の文化と社会意義だけでなく、原料の産地、製作地と消費地および特殊な製作技術などに関係のある地域間文化交流と密接な関係がある。本文では、象嵌技術とトルコ石装飾品の議論を中心に、これらトルコ石装飾品の利用および象嵌技術の出現背景、および関係する原材料の産地と消費地の関係を解明していく。

2. 海外におけるトルコ装飾品および象嵌技術研究の状況

中国だけでなく、世界史上においてトルコ石の利用と象嵌技術の出現はたいへん古く、悠久の歴史をもち、世界中を見渡すと、トルコ石の産地は古代ペルシア（イラン）、アメリカ、ソビエト連邦、エジプトや南アメリカなどの地があり、中国国内では、湖北西北部、陝西省、新疆ウイグル自治区、安徽省などでも相当の埋蔵量がある。但し、トルコ石とその他の石材が共存するため、純粋な埋蔵量は低く、往々にして10トンの鉱石に含まれるトルコ石は僅か1キロ程度である。そのため、トルコ石はある種の貴重な自然原石として、古代中国だけでなく世界史上においても、トルコ石或いはトルコ石の象嵌は一握りの権力者がコントロールし、富と権力の象徴となっていたのである。

そのため、象嵌技術とトルコ石製作の研究は、古代中国のみならず、世界的な研究課題である。中央アジア、北米と中南米もまたトルコ石産地と利用が盛んな地であり、研究者は当該地域における古代のトルコ石交易及び貿易ネットワークに関する多くの成熟した研究があり、これら研究成果は古代中国のトルコ石研究を進めていくうえで、大変有益である。

(1) 中央アメリカ原住民文化とマヤ文化のトルコ石装飾と象嵌

北米西南部から南アメリカへ至る太平洋沿岸は、一帯が花崗斑岩、石英斑岩や石英緑閃岩といった、半深成岩の岩体中で形成される斑岩銅鉱床であり、イラン高原と同じような条件下にある。考古学者の研究によると、中南米各地の古代文明は、これら自然条件が大変酷似した環境下にあったが故に生存繁栄しており、トルコ石の流通がもたらす長距離ネットワークや流通網の発達と密接な関係にあるアメリカ原住民や中南米の古代文明はみな太陽神崇拜であり、彼らは白昼の青空を象徴する色として神殿に用い、トルコ石の瘴邪の力を求め成功した(図1)。考古資料によれば、アメリカ西南部各地で採掘されたトルコ石は、ニューメキシコ州のチャコ溪谷に集められ、9世紀の間研磨加工の拠点となり、その後、ここから中米や南米各地へと流通が広がっていったことが、この集落地で発見された大量のトルコ石の製作工具から明らかとなっている。このほか、母岩を砕いてトルコ石を取り出すだけでなく、加熱後に冷却して母岩を砕きトルコ石を得ていた現象も捉えられている。このトルコ石工房では、総重量がおおよそ10万トンにもなる破片と関連遺物が発見されており、当時の巨大な労働力が推察される²。

12世紀では、メキシコ中部高原のアズテック(AZTECS)族の人々が、視覚に訴えかけるよう、仮面や刀子の柄にトルコ石を象嵌することを多用していた。これらのトルコ石もまたモザイク装飾が施され、金、水晶、孔雀石、黒玉、珊瑚や貝殻などと共に象嵌されている。トルコ石の象嵌に用いる接合材は天然の樹脂、漆や天然アスファルトなどの類である。主な素材は木、骨や貝などである(図4)。アズテック族同様に、当該地域のその他の部族もまた、トルコ石で作られた護符が重用され、各部族間における彫刻

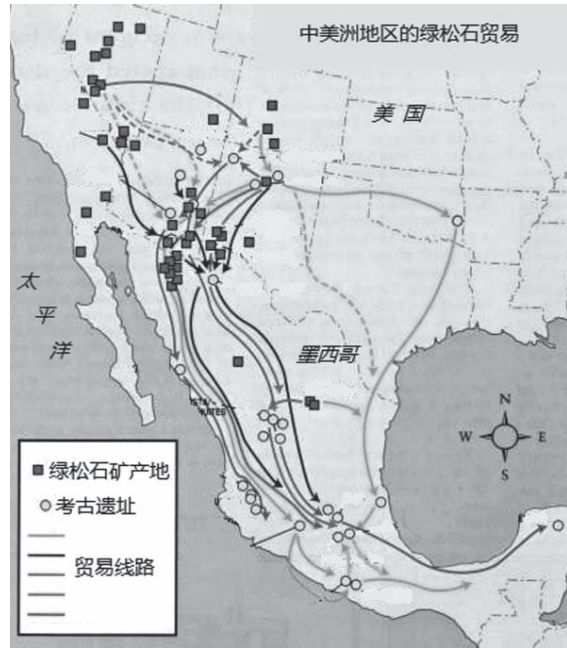


図1 中央アメリカのトルコ石貿易見取り図

品をみても、トルコ石をモザイク状に象嵌したマスクが多い。このほか、これらの部族間では、扁円形の珠類やペンダントの製作が流行している³(図5)。

中米のマヤ文化では、後古典期でもトルコ石が象嵌された装飾品が多数発見されている。後古典期以前でのマヤの人々は、翡翠装飾品或いは翡翠片象嵌を多用しており、その象嵌そのものは古代中国のものと異なるものの、装飾品の類を除き、主にモザイク装飾を施した仮面、武器、工具の柄や儀礼用品に用いられている。特に、大型貝殻に施された象嵌がよく見られる。つまり、これら象嵌された大型貝殻の多くは、儀礼性の高い器物であり、権力者が容器の中に収めて祭祀で用いるものである。このほか、ある種の習俗として翡翠或いはトルコ石を権力者または貴族の歯に象嵌し、その身分と社会的地位を誇示する(図7)。当然、象嵌された装飾品のほか、マヤの人々は、管珠、円珠やペンダントの装飾品なども製作して用いていた(図6)。但し、ここでは大変希少なながらも陽起石、透閃石といった軟玉が発見されており、明らかに異なる地域、異なる文化をもった人々の異なる

² Thomas Stollner, Markus Reindel, Guntram Gassman, Benedikt Grafingholt and Johny Isla Guadrado: "Pre-Columbian Raw-material exploitation in southern Peru-Structures and perspectives" Volume 45, N1, 2013 Paginas105-129 Chungara, Revista de Antropologia Chilena.

³ 竹田英夫「マヤ文明とヒスイ」『地質ニュース』1983年11月351号 P.36-45。

		BEAD	MOSAIC													Total Entries		
		Bead Ornament	Mask	Skull Mask	Shield Disk	Wooden Tablet	Knife Handle	Flint	Deity Animal Figure	Pectoral	Small Disk	Ear Ornaments	Labret	Other Mosaic Ornaments	Other Mosaic Objects		Others	
MEXICA	Central Valley																	
	Templo Mayor	2	-	-	3	-	-	12	-	-	16	-	-	6	-	126	165	
	Tenochtitlan	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	5	
	Aztec-Mixtec Style	-	6	2	2	-	-	3	-	9	2	1	-	1	-	-	26	
NON-MEXICA	Zapotec-Mixtec	Tototec	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
		Caves	-	18	-	19	2	-	-	-	-	2	5	-	-	-	not counted	46
	Maya	Tombs of Monte Alban	55	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	35	94
		Other tombs	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	not counted	5
		Other sites	3	5	1	1	-	-	-	1	1	2	5	1	1	-	-	21
	West	Maya	-	2	1	4	-	-	-	-	1	-	4	-	-	-	4	16
		Guerrero	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
		Alta Vista	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	not counted	2
		Other Classic Sites	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	not counted	1
	Tarascan	Tarascan	4	-	-	-	-	-	-	-	1	1	4	2	-	-	not counted	12
Total		66	33	6	31	2	3	12	11	6	22	22	4	12	5	161	396	

Notes:

- 1) 165 entries of Templo Mayor Offerings include uncountable fragments.
- 2) The objects in the category of Aztec-Mixtec style are kept in the museums in Europe & USA with no information of provenance.
- 3) Caves: Acatlan, Santa Ana Teloxtoc, Tehuacan, in Puebla; Cheve, Ejutla in Oaxaca.
- 4) Other tombs: Zaachila, Cuilapan, Xoxo, Yanhuilitlan, Huitzo
- 5) Other sites: Coixtlahuaca and Coxcatlan.

図2 中央アメリカにおける考古遺跡発掘出土のトルコ石 (AD250~1200) (井関陸美2008より引用)

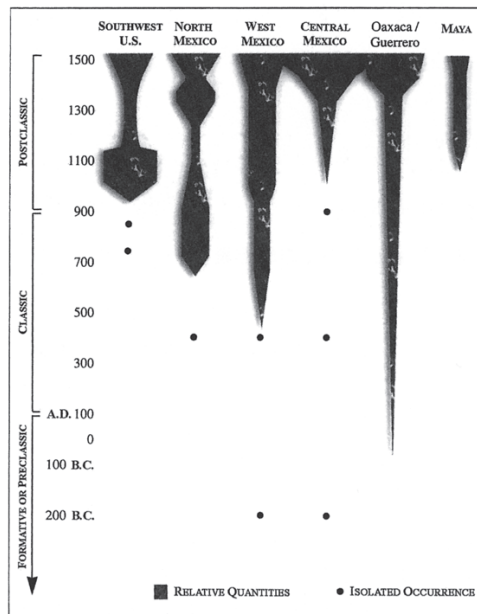


図3 中央アメリカトルコ石使用量の変化 (井関陸美2008より引用)



図4 中央アメリカマヤ文明の翡翠とアズテック族のトルコ石象嵌仮面 (1. Jadeite Mask from Piedras site in Maya culture. 2. Jadeite Mask of Palenque's King Pascal. 3&4. Turquoise mask MEXICO AZTEC MIXTE)

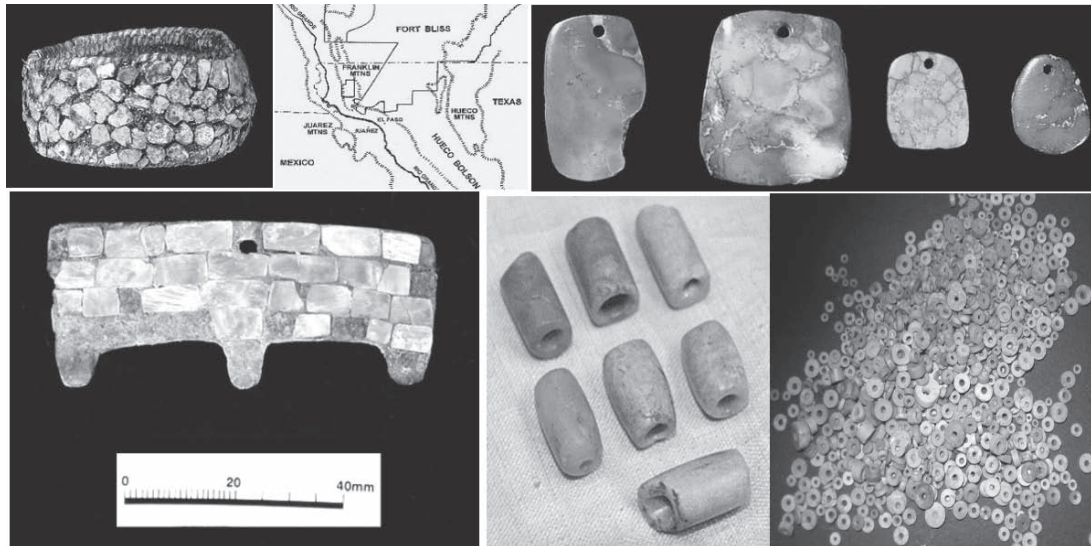


図5 中央アメリカのトルコ石と貝殻象嵌腕輪およびトルコ石管珠
 (左3つ: Hueco Mountains near El Paso sheltered洞穴遺跡出土 右3つ: その他の遺跡出土)



図6 グアテマラのマヤ文化貴族墓出土の翡翠管珠装飾品



図7 マヤ文化の翡翠象嵌
 (左上下: 貝殻の象嵌 右上: 貴族の歯への象嵌
 右下: 貝殻内へ納められた翡翠) ホンジュラス歴史博物館 撮影者: 著者2017

る習俗であることがわかる。中南米地区の古代文化では、青緑色の装飾品が最も好まれており、日本のマヤ研究者である青山和夫氏と井関雅美氏の研究によれば、中米では、先古典時期から青緑宝石を大変重要視し始めており、それは、グアテマラ南部高地に翡翠鉍石の原産地があり、古典期後期以降遠距離交易の拡大とともに産地が離れている中央アメリカ北部地区のトルコ石もまた重要視され、儀礼用として大量に利用され始める⁴ (図2、図3)。トルコ石の産地は主にメキシコ中央高地のオアハカ地区にあり、遠距離交易は権力者がトルコ石を装飾品や儀礼用具に用いて特殊な社会的意義をもたらす機会となる。マヤの古代神話の中には、青緑色は世界の中心を象徴し、主要な神はみなトルコ石に囲まれた場所に住んでいると考えられている。このほか、トルコ石の緑色は太陽軌道の青空色を表していることから、太陽神を信仰するマヤ文化では、トルコ石で作られた英雄の装飾品がよく知られている⁵。

(2) その他の地域におけるトルコ石利用

ペルシアでは、トルコ石は事実上国の宝として千年以上もの間流行した。装飾品、馬具やモザイク装飾だけでなく、重要な建築物の装飾にもトルコ石が施されるなど、応用範囲は相当広がった。ペルシアでは、トルコ石はアラブ文字彫刻の祈祷文にも重用され、その後、金製品に象嵌されるようになる。

古代エジプトでは、最も早くトルコ石の利用が始まり、その時代はおおよそBC4世紀の第一王朝期まで遡ることができる。彼らは金の指輪、胸飾りや首飾りにトルコ石を用いており、まずトルコ石を珠状などの形状に加工した後、装飾品に象嵌する。時には瑪瑙などの宝石と共に扱うことがあり、後期ではガラス製品に象嵌することもあった。古エジプトで利用されたトルコ

石の多くは、シナイ半島西海岸にある6カ所の鉍山から産出されたもので、考古学的な発掘調査によれば、これらの鉍山はおおよそ5000年前から採掘がはじまったとされる。このほか、鉍山付近の女神神殿の柱で文字が発見されており、その内容によれば、古代エジプト人はこの鉍山のある地を「緑色鉍山大地」と呼んでいたという。文献の記載によれば、BC3200年の初期王朝時代からBC15世紀中期のトトメス王朝の歴代王都では、これら鉍山において採掘活動をはじめ、その後放棄され、19世紀に入りこれら鉍山遺跡は再び発見される。考古学者たちがエジプトの古代墓を調査中に発見し、エジプト国王がBC5500年にはすでにトルコ石の珠類を帯びていたことが明らかとなっている。最も貴重なトルコ石の装飾品は、5000年以上も前のエジプト皇后(Zer皇后)のミイラの腕に4つのトルコ石が象嵌された金のブレスレットであろう。古エジプトの著名なツタンカーメン王の黄金のマスクにも大量のトルコ石が象嵌されている⁶。

⁴ 青山和夫・井関雅美「メソアメリカ文明の環境利用例としての緑・青色石製品—マヤ文明の緑色黒曜石製石器とアステカ王国のトルコ石製装飾品の社会的な意味」『古代アメリカ』15、2012年、P.33-50。

⁵ 井関雅美「アステラ・テノチティラン主神殿出土のトルコ石の象徴性」『古代アメリカ』11 2008年、P.35-46。

⁶ イアン・ジョー、ポール・ニュルソン(内田杉彦訳)『大英博物館古代エジプト百科辞典』原書房、1995年。

第二章 中国新石器時代出土のトルコ石装飾品と象嵌技術

1. 新石器時代のトルコ石装飾品

トルコ石装飾品は、中国においておよそBC7000年の新石器時代前期より始まる。考古発掘資料でいまのところ最も早いトルコ石の装飾品は、裴李岡文化の出土物である。陳星燦氏の研究によれば、河南省中部では、裴李岡文化の遺跡に均しく有孔で不定形のトルコ石の首飾りがみられ、これら首飾りの多くが墓の副葬品である。出土位置が明らかな首飾りは、墓主である被葬者の首から肩にかけて、頭部、耳、腹部および歯に配置されていた(図10)。5つの遺跡からは計86点が出土しており、そのうち74.07%は墓葬から、土坑と文化層出土はそれぞれ12.96%である。このことはトルコ石が装飾品或いは習俗の性質が更に強まったことを暗示している⁷。これは、簡単な首飾りという特性をもったトルコ石装飾品が仰韶文化中期まで持続するものの、考古資料では中原地区の仰韶文化遺跡から出土したトルコ石装飾品の数量にバラツキがある。ある遺跡からは集中して出土しており、例えば河南省南部の下王崗遺跡、陝西省南部の龍崗寺遺跡がある。出土点数は多いものの、ほとんどが単純な耳飾りや首飾りだけである。他の遺跡では1～2点の数点しかないであり、例えば河北省易県北福地遺跡⁸が挙げられる。多くの遺跡からは全く発見されない。図8は、新石器時代から初期青銅器時代に発掘され出土したトルコ石装飾品遺跡の分布図である。データ資料は、2014年に龐小霞氏が新石器時代出土のトルコ石装飾品研究において集積した基礎データをもとにしている⁹(図8)。

統計によると、裴李岡文化時期の5か所の遺跡から出土したトルコ石は計86点となる。大地湾文化期になるまで、龍崗寺遺跡と北首嶺遺跡

の2か所でトルコ石が発見されるのみであるが、その数量は89点にも及ぶ。仰韶文化半坡類型段階では、11遺跡からおおよそ133点のトルコ石装飾品が見ついている。龍山文化期になるまで、9か所の遺跡から15点のトルコ石が発見されるだけであり、仰韶文化から龍山文化になるにつれて、トルコ石装飾品は急激に減少する特徴的な現象が暗示される。これと同時期の黄河上流域の甘青寧地区では、馬家窯文化前期は宗日遺跡と核桃庄遺跡のみで12点のトルコ石が発見されている。但し、半山類型時期には8か所の遺跡で54点、馬廠類型時期では5か所の遺跡から247点、齊家文化時期の3か所からトルコ石装飾品が発見されている。明らかに黄河上流域は時代が経るに従い遺跡の数量と出土するトルコ石の数量が反比例する現象が見られる(図9)。つまり、トルコ石が出土する遺跡数は減少するけれども、出土するトルコ石の数量は却って増加しており、トルコ石製品の多くがひと握りの人々によるコントロール下で利用されていたことを暗示しており、富の程度と社会における貧富格差が激化していたことを十分に表している。紅山文化は主に北方地区に分布し、新石器時代全体を通じて11か所の遺跡から計41点のトルコ石が発見されている。特に特定の遺跡に集中しておらず、一般的な装身具の類として利用されていたのであろう¹⁰。

長江中流域の6か所の遺跡からは30点のトルコ石が、下流域の9か所の遺跡からは44点のトルコ石装飾品が発見されている。長江中流域では大溪文化期に比較的多いが、石家河文化時期には少なく、時代とともに減少傾向にある。長江下流域では反対に、河姆渡-馬家浜-崧沢文化期では、上海や江蘇省北部の一帶の福泉山遺跡や花厅遺跡にトルコ石装飾品が見られるものの数は大変少なく、分布域も普遍的ではない(図11)。良渚文化期になると5か所の遺跡から44

⁷ 陳星燦「裴李岡文化緑松石初探-以賈湖為中心」『世紀的中国考古学』科学出版社2009年。孔德安「浅談我国新石器時代緑松石及製作工艺」『考古』2002年第5期。

⁸ 河北省文物考古研究所『北福地』、科学出版社、2010年。

⁹ 龐小霞「中国出土新石器時代緑松石器研究」『考古学報』2014年第2期。

¹⁰ 中華玉文化研究中心・中華玉文化工作委員會編『玉魂国魂-紅山文化玉器精品展』、浙江古籍出版社、2009年、杭州市。

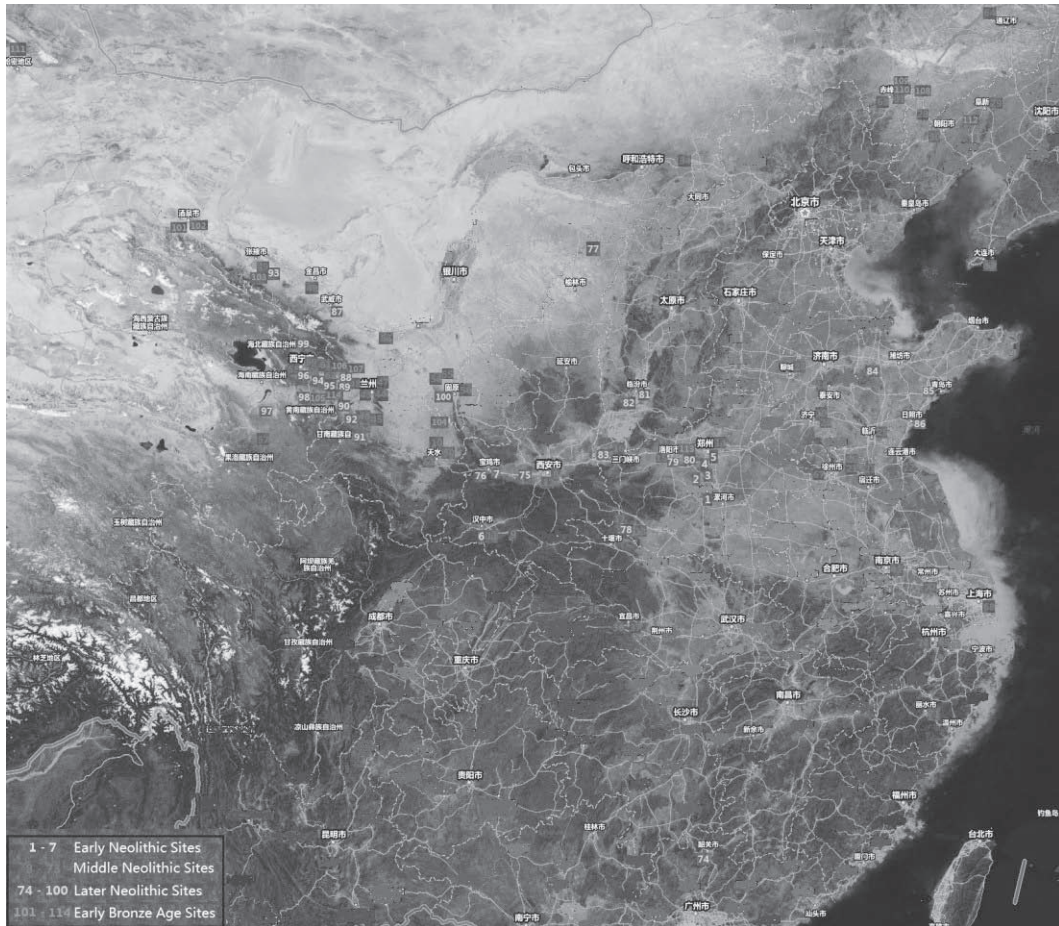


図8 新石器時代遺跡出土のトルコ石装飾品

表六 新石器時代各地区不同时期不同单位出土绿松石数量及比例统计表

时代及地区 出土单位及比例	新石器 时代中 期	新石器时代晚期						新石器时代末期						
		黄河上 游地区	北方 地区	中原 地区	海岱 地区	长江 中游	长江 下游	黄河 上游	北方 地区	中原 地区	海岱 地区	长江中 上游	长江 下游	华南 地区
墓葬	71	12	7	109	63	11	3	356	11	9	15	3	41	16
比例(%)	76.34	5.11	28	81.95	94.03	40.74	100	100	91.67	60	100	100	100	100
灰坑、地层及其他	22	不清	11	21	3	15	0	0	1	5	0	0	0	0
比例(%)	23.66	不清	44	15.79	4.48	55.56	0	0	8.33	33.33	0	0	0	0
不清	0	223	7	3	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0
比例(%)	0	94.89	28	2.26	1.49	3.70		0	0	6.67	0	0	0	

図9 中国新石器時代各地域に時代ごとに出土トルコ石点数および比率（龐小霞2014より引用）

点のトルコ石装飾品が発見され、時代とともにその点数は増加傾向にある¹¹。

黄河下流域の山東地区では、10か所の遺跡から計67点のトルコ石が発見され、龍山文化期では3か所の遺跡のみでトルコ石が発見されているが、その数量は82点となる。この現象は黄河上中流域と酷似しており、時代の変遷とともにトルコ石が儀礼装飾品となる遺跡数は減少するものの、トルコ石の数量は却って増加しており、トルコ石が次第に支配階層や権力者階層に注目されていたことを暗示している。また社会階層の格差やひと握りの権力者の手に富が集中していたことを表しており、こうしたトルコ石に見られる社会現象は、黄河流域のみならずその他の地域でも見られるものの、時代の変化が見られるのではなく、一般的な装飾品としての社会的価値となっていたことは明らかである。そしてこれら地区は、まさに伝統的な玉器文化が非常に発達した時期であり地域なのである。

陝西省南鄭県龍崗寺遺跡は、今から7000年前の新石器時代前期から6000年の仰韶文化半坡類型と廟底溝類型の墓地である。77点のトルコ石装飾品が新石器時代前期の3点を除いてその他はすべて仰韶文化期の30基の墓から見つかっている。研究結果によると、これらトルコ石が副葬されていた墓のうち19基は女性、8基は男性、3基は子供、2基は性別不明となる。統計によると、これら副葬されたトルコ石は、シャベル形、梯子形、長方形、多辺形、円形、棗種形と三角形の7種に分類される。シャベル形と円形は27点、28点と、総数の80%以上を占める。出土位置からみえる用途を考えると、主に耳飾りと首元を飾るペンダントやネックレスである(図12左)。形状にかかわらず、用途と製作技法は、新石器時代前期の裴李岡文化と大差な

¹¹ 浙江省文物考古研究所・桐郷市文物管理委員会『新地里』上下、文物出版社、2006年。浙江省文物考古研究所編著『瑶山』文物出版社、2003年。浙江省文物考古研究所編著『反山』上下、文物出版社、2005年。鄧聡・曹錦炎主編、浙江省文物考古研究所・香港中文大学中国考古芸術研究センター編『良渚玉工』、香港中国考古芸術研究中心専刊【十七】、2016年、香港。浙江省文物考古研究所・北京大学考古文博学院など編著『権力と信仰—良渚遺跡群考古特展』図録、文物出版社、2015年、北京。

い¹²。

下王崗遺跡は、河南省南部の漢水支流の丹江流域に位置し、やや規模の大きな仰韶文化期の墓地である。仰韶文化第1期では2点のトルコ石製耳飾りが発見されたただけだが、第2期は最多の23点、第3期は再び減少して5点で、龍山文化期は3点のみで、すべてが耳飾りである(図13左)。中原地区の仰韶文化期にトルコ石が集中して出土するこの2遺跡は共に長江支流の漢水流域に位置する¹³。

発掘資料で明らかなのは、トルコ石の主な分布が黄河流域、遼河流域および長江支流の漢水流域ということである。その分布状況、装飾品の形態および製作技術もまた時代の変遷とともに変化している。

董俊卿氏らの河南省内における新石器時代から初期青銅器時代出土玉器種類の数量比率の研究結果によると¹⁴、新石器時代から二里頭文化期では、玉類装飾品はトルコ石が主体であるが、殷代以降は透閃石が主体となる。具体的な分布比率は、新石器時代は60%以上であるが、二里頭文化時期は30%まで減少し、殷代以降は4%に留まる。そして、春秋戦国時代には再び25%まで増加する。トルコ石が出土した最も多い遺跡は、裴李岡文化期では賈湖遺跡、仰韶文化期は下王崗遺跡、二里頭文化期では二里頭遺跡となる。トルコ石の産地分析結果は、賈湖遺跡と下王崗遺跡より出土したトルコ石の自然科学成分と酸化物が同一であることが明らかとなっているが、いまだ産地は特定できていない。但しこれらは、純粋なトルコ石、緑松石—鉄緑松石および緑松石—亜鉛緑松石といった鉍石に分けることができる。

そのほか、新たにトルコ石を分析した地域としては、黄河上流域の甘青寧(甘粛省・青海省・寧夏回族自治区)地区となる(図13左)。特に馬家窯文化の諸遺跡からトルコ石の装飾品が多く出土しており、ここでは青海省柳湾墓地を例

¹² 陝西省考古研究所『龍崗寺』、文物出版社、1995年。

¹³ 河南省文物研究所・長江流域規画弁公室考古隊河南分隊『浙川下王崗』文物出版社、1989年。

¹⁴ 董俊卿など「河南境内出土早期玉器初步研究」『华夏考古』2011年第3期。

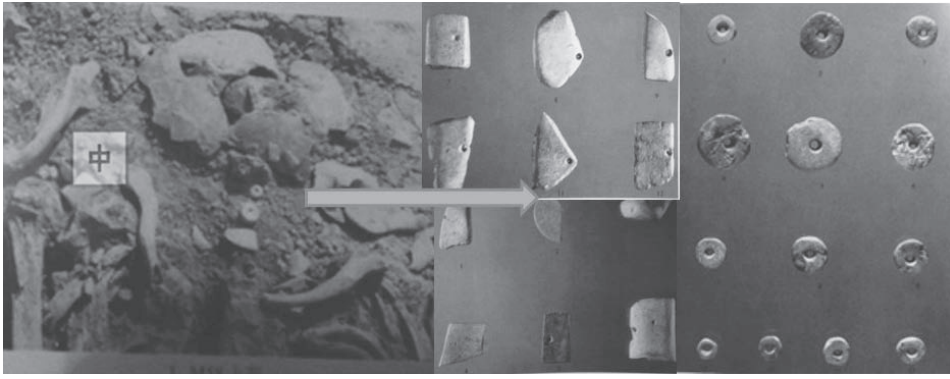


図10 賈湖遺跡出土のトルコ石装飾品（『舞陽賈湖』文物出版社1999より）

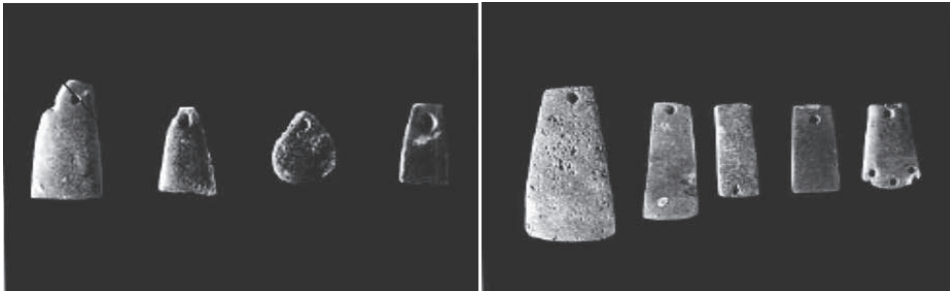


図11 花序遺跡出土のトルコ石装飾品

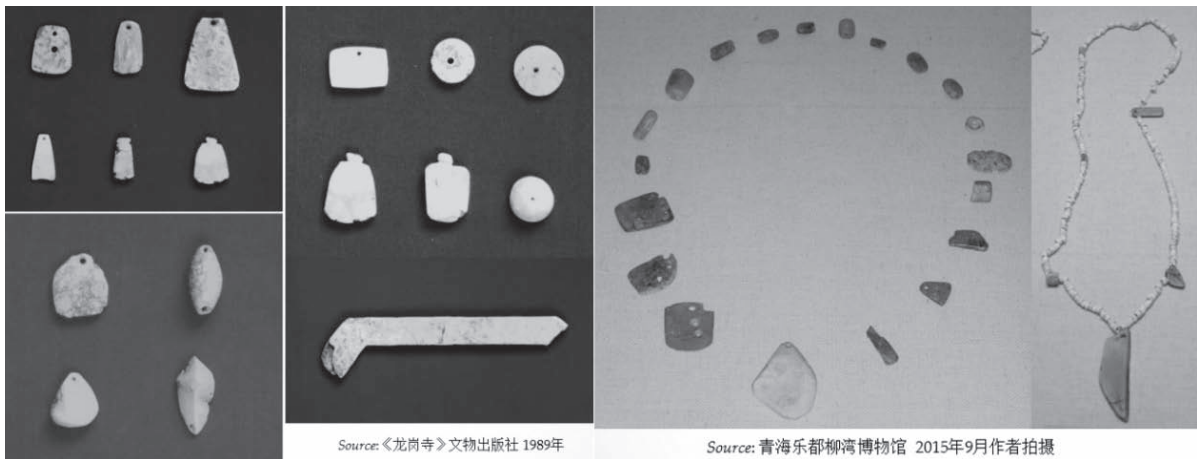


図12 龍崗寺遺跡（左）と柳湾墓地（右）出土のトルコ石装飾品

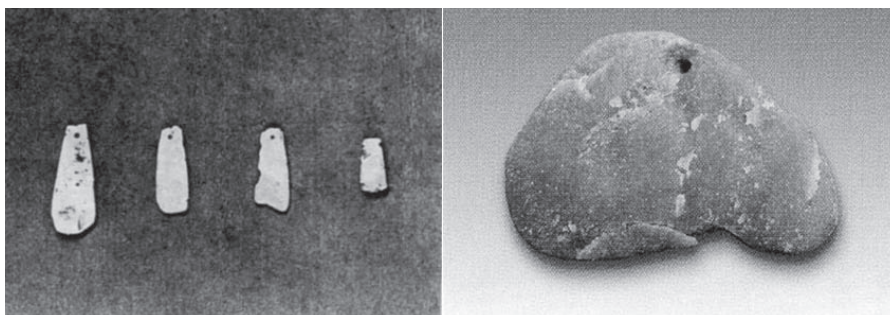


図13 下王崗遺跡（左）と北福地遺跡（右）出土のトルコ石装飾品

に分析する。柳湾墓地は、馬家窯文化半山類型、馬廠類型、齐家文化と辛店文化が属する墓地である¹⁵。BC2505年の半山類型とBC2415～2041年の馬廠類型は新石器時代中期に属しており、半山時期は257基、馬廠時期は872基の墓が発見されている。副葬品の装飾品を見ると、半山期の26基の墓から計40点のトルコ石装飾品が首元と胸元から見ついている。馬廠時期は更に前、中、後期の三期に細分され、16基の墓からトルコ石飾りが発見されている。そのうち12基は女性で、計204点出土しており、その大部分が頭部、首元と胸元から出土して、例外はない(図12右)。このほか、初めて馬廠類型の墓葬からトルコ石と海貝が伴ったネックレス(M615、M916)と扁平型のトルコ石に骨珠が象嵌された飾り(M1086)のほか、119点の穿孔のない扁形のトルコ石片(M1406)が発見されている。扁形のトルコ石片はすべて方形か梯子形で、長さとは幅は1×0.4～0.5cmとなる。報告には詳細な説明がなされていないが、これらがおそらく象嵌用のトルコ石片であり、象嵌用の主体素材は腐朽しなくなっていると推察される。この地区には宗日遺跡からも骨製の腕輪にトルコ石を象嵌する人骨の右腕に発見された。おそらく、この二例は甘青地区で初めて発見されたトルコ石象嵌の事例であろう。そのため、いまのところ考古資料から言えることは、少なくとも中国古代の象嵌技術は新石器時代の中後期に発生したであろうということである。やはり柳湾墓地では、発見された齐家文化時期の343基の墓のうち26基の墓から34点のトルコ石装飾品が見つかり、そのうち11基が女性で、8基からトルコ石と首飾りが共に頸部に飾られていた。M1061は男女合葬墓であり、トルコ石が口の中に入れていた。海貝のほか、初めて瑪瑙珠も発見されている。尕馬台遺跡の齐家文化では装飾品が141点発見され、トルコ石を除くと、大部分が白色の大理石のネックレスであり、このことはトルコ石、白色の大理石と海貝、赤色の瑪瑙で作られたネックレスが非常に重視され、色彩

の組み合わせとして強調されていたのであろう(図16)。

2. 新石器時代から初期青銅器時代のトルコ石装飾品の分類

装飾品の分類については、実際にはその製作技術の分析研究となる。つまり、素材との対応、加工や製品に対する成形すべてにおいて、その時代の製作技術と製作者が求める用途に起因するため、十分に意義がある。トルコ石の製作技術とその時代の玉石器の製作技術とは一致しているが、素材そのものの自然条件に左右され、トルコ石特有の特徴もまた、製作と成形に影響している。

龐小霞氏の研究によれば、新石器時代前中期のトルコ石の種類は大変豊富で、形状からおよそ7類型に分類可能であり、それぞれの類型は更にA～F形式に区分される。しかし、私から見れば、この時期のトルコ石の形式は多様であるが、用途は非常に単純である。大部分が簡単な製作によるペンダントやネックレスとなる。或いは、不規則な形状をしたトルコ石は、何某かの装飾品の一部分であり、動物型をしたものも見られる。但しこれらの表面的には多種多様な形態を持つトルコ石装飾品であるが、詳細に観察すると、多くの形態が実は人為的なものではなく、美しさや目的とする用途に応じた形ではなく、原石の形状にやや手を加えた簡単な形態となっている。例えば、大量の垂飾で、三角形、梯子形、方形、菱形或いは半円形などが挙げられる。三角形或いは梯子形の垂飾の多くはサイズが揃いで、縁辺も均一でないなど、明らかに製作時に原石に合わせた加工によるものであろう¹⁶(図15)。

新石器時代後期から初期青銅器時代に至ると、トルコ石の分類は大きな変化をみせ、まず垂飾が減少し、管珠、円珠類の装飾品の数量が増加する。ネックレスもまた規格性が増し、形状からも前時代と比べて単一化する¹⁷(図18、図19)。製作技術のうへで難度が高い長形管状

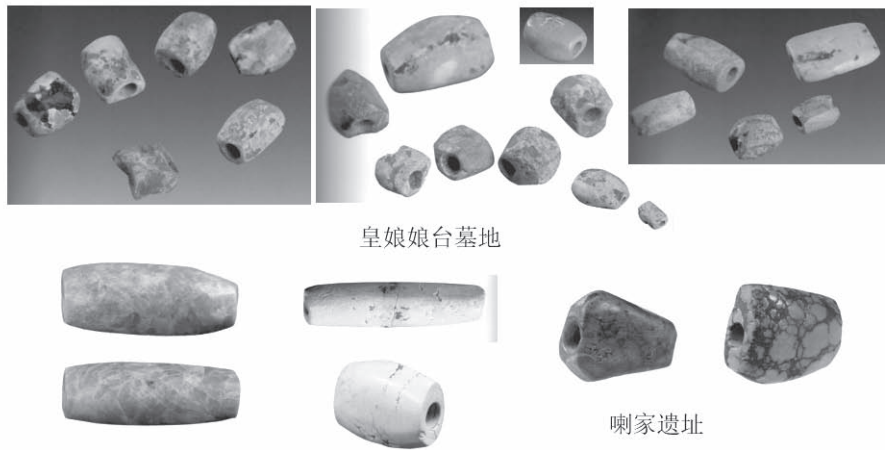
¹⁵ 青海省文物考古研究所『青海柳湾』、文物出版社、1984年。

¹⁶ 中華文明之旅シリーズ『玉澤陇西—齐家文化玉器』、北京美術攝影出版社・北京出版集团公司、2015年、北京。

¹⁷ 同15



図14 宗日遺跡（左）と紅古下海石遺跡（右）出土のトルコ石装飾品



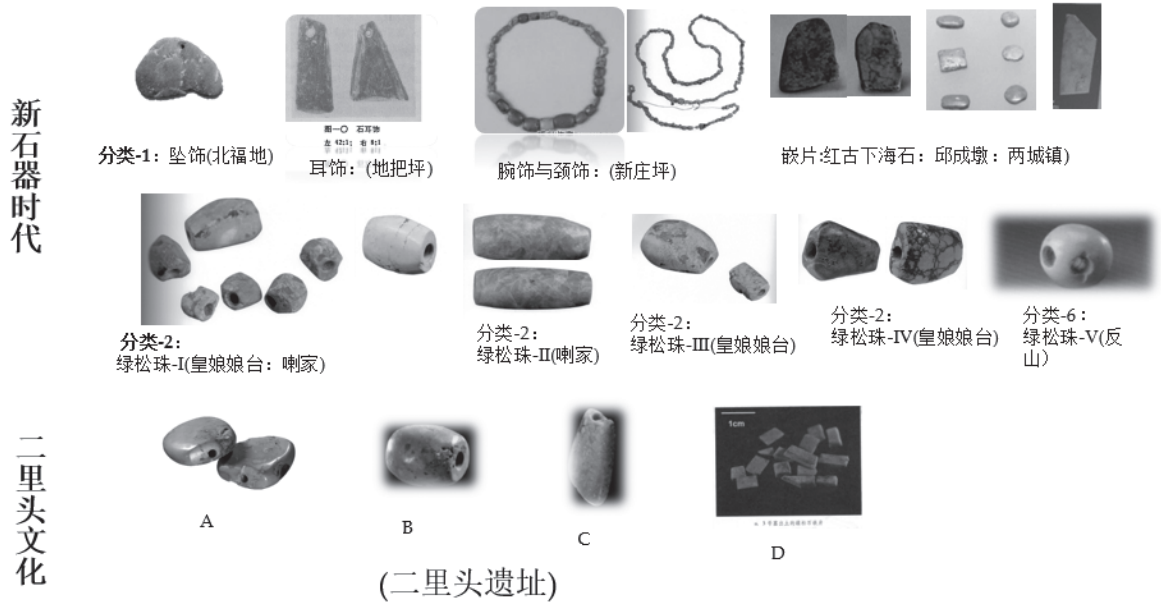
Source: 《玉潤陝西-齐家文化玉器》2015 北京美術攝影出版社

図15 齐家文化遺跡出土のトルコ石管珠玉



Source: 《貴南尕馬台》科學出版社2016年

図16 尕馬台青銅器時代遺跡出土のトルコ石装飾品



Source: 《二里头-1999-2006》

図17 新石器時代から青銅器時代のトルコ石装飾品類型

表一 中原地区出土の仰韶文化绿松石器形状与数量统计表

	三角形	圓形	梯形	(近)长方形	璜形	梭形	三棱体	菱形	鱼形	椭圆形	不规则形	斧形	不详
龙岗寺		28	5	7	1	1	1				5	27	
下王岗			12	1						8	1		1
何家湾		5								1			3
庙底沟				2						3	1		
北首岭				1						2			
姜寨			1	1							2		
王湾			1	1							1		
大河村							1	1	1				
大地湾													
零口村			1										

図18 中原地区仰韶文化出土トルコ石類型と数量統計（龐小霞2014より引用）

珠と円珠形の出現は、この時期における前時代と最も異なる点であり、トルコ石の性格と製作技術の変化が明らかに見られる（図17）。このほか異なる点は、トルコ石象嵌の出現である。象嵌品の多くは不規則な形状ではあるが、薄く小さな象嵌品もまたトルコ石の用途と製作技術の革新的な点である。初期青銅器時代になるまで、トルコ石装飾品の種類は新石器時代ほど豊富ではないが、象嵌技術の進歩によって、象嵌に用いる破片は多様性をもつ。特に二里头遺跡

の大量の象嵌片は方形や長方形といった規格性を持って成形されており、製作技術に前時代と比べ大きな変革があったことを暗に意味している。つまり、1辺が0.1cm、厚さ0.5cmの象嵌片は規格性をもって切り割り磨かれており、相応の工具と技術がなければ成しえないものである。そのため、この時期の象嵌の機能はトルコ石の主要な用途であった。

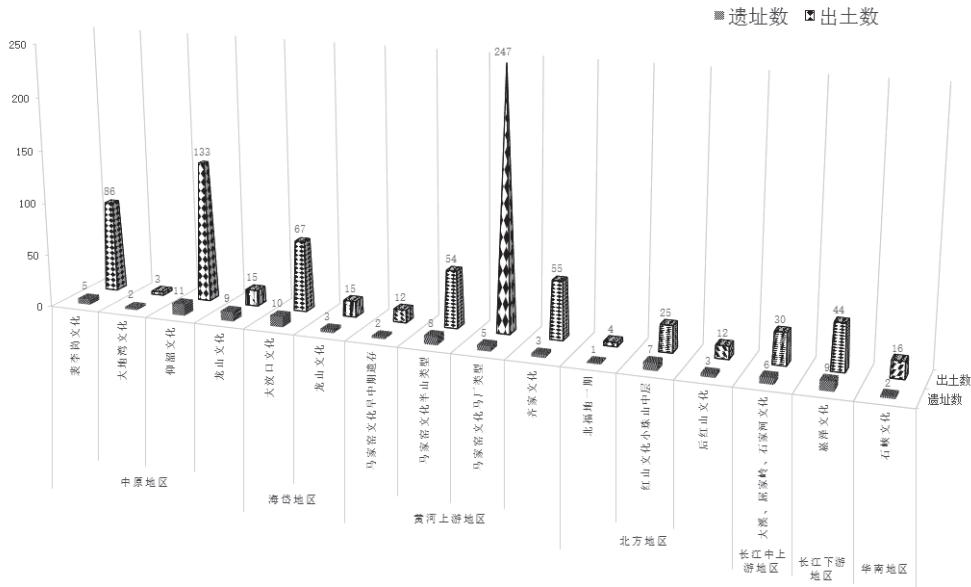


図19 中国7大地域における新石器時代出土トルコ石の数量統計（龐小霞2014年統計データより秦作成）

3. トルコ石装飾品のサイズ

研究成果によると、トルコ石の多くは、砂石が固まる際の空隙の薄く細かな原石が生長したもので、大型で重厚なトルコ石は大変希少である。このことは、トルコ石が軟玉などの玉石器のような工芸製作に不向きであり、前期においては多くが簡単なペンダントであるが、その後、トルコ石を帯びた装飾品は小薄の石片とその他の素材を組み合わせる象嵌したものが多数発見されるようになる。トルコ石がもつ自然特性は技術制作上における象嵌技術と密接な関係がある。それでは、考古学的に出土したトルコ石の実物を見ると、いったい、そのサイズはどのような状況にあるか、ここでは、トルコ石の出土点数が多く、一定量が出土しており統計可能な賈湖遺跡、龍崗寺遺跡と柳湾墓地を例にあげて分析を進めていく。

賈湖遺跡は近年新たな調査により、更に多くの新発見があるとともに、以前よりも注目されるべき大量のトルコ石の副葬品が発見された。但し、関係される資料はいまのところ未発表であり、ここでは以前に出版された報告書を用いて分析する。賈湖遺跡は河南省中南部の舞陽県に位置し、この遺跡で最も注目されるのは、大量の骨製の笛と墓に副葬された大量のトルコ石装飾品である。報告書によると、サイズが記録

された53点のトルコ石装飾品に対して統計分析されている。その結果は以下の図20のとおりであり、三角形、梯子形、菱形、方形や円形などの装飾品といった多様な形態があり、形状のサイズにかかわらず、長さ2.0cm、幅1.2cmの間にあり、8点のみ長さが2.5～3.5cm、2点が幅1.2～1.8cmとなる。明らかにこれらトルコ石は小型の原石で作られており、多角形の珠類もまた小型である（図20）。

仰韶文化期の南鄭龍崗寺遺跡のトルコ石装飾品のサイズについて分析する。龍崗寺遺跡では、異なる時期で計76点のトルコ石が出土しているが、サイズがわかる資料は、仰韶文化期では13点となる。長さは2.0～5.0cmにおおよそ集中し、裴李崗文化の賈湖遺跡のものと比べると大型になる（図21）。

青海省楽都県に位置する柳湾墓地は、馬家窯文化半山類型から馬廠類型と齐家文化に跨る複合墓地である。ここでは馬家窯文化期の半山、馬廠類型と齐家文化のデータについてそれぞれ統計分析をおこなう。図22の菱形と方形と三角形はそれぞれ半山、馬廠と齐家文化を表す。図22が示しているとおおり、3時期のサイズは基本的に一致しており、長さ1.0～3.0cm、幅0.2～1.5cmに集中しており、僅かに長さ3.0～4.0cm、幅1.5～2.7cmのものが見られる。トルコ石装飾

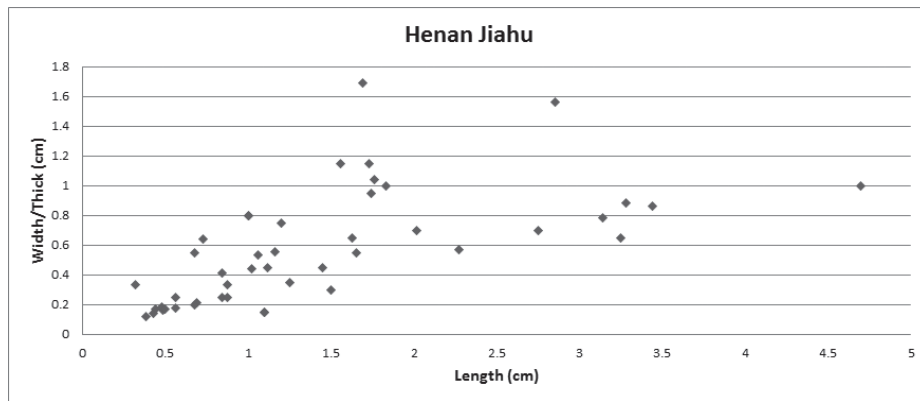


図20 賈湖遺跡裴李岡文化期における出土トルコ石のサイズ

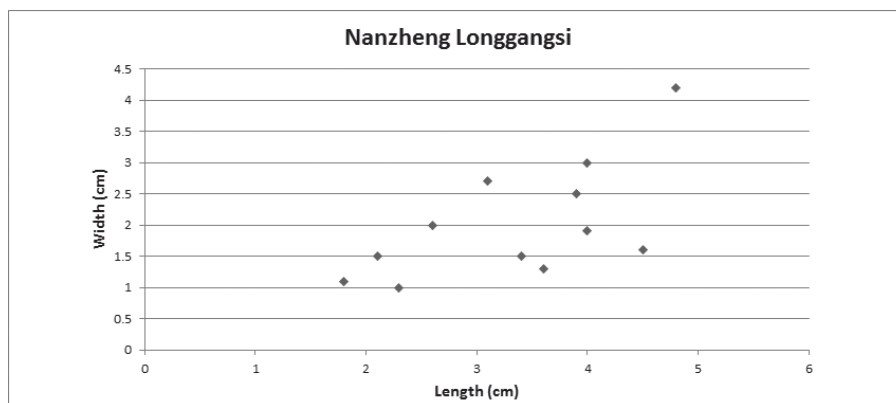


図21 南鄭龍崗寺遺跡出土トルコ石のサイズ

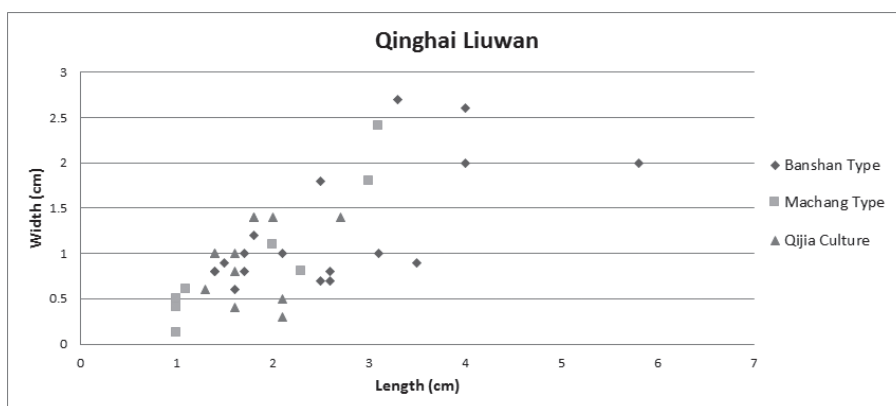


図22 青海柳湾墓地出土トルコ石のサイズ

品はすべて小型であり、中原地区前期の賈湖遺跡とほとんど同じである。以上、3遺跡それぞれ異なる地域、異なる時代ではあるが、トルコ石装飾品が比較的小型であることは偶然ではない。漢水流域の龍崗寺遺跡のトルコ石がやや大型だとしても、一般的な玉製品の環、璧、璜などの大型玉製品のサイズには及ばず、僅かにトルコ石で見られるのは垂飾類だけである。このことは、小型であることがトルコ石装飾品の特徴であり、この特徴は、利用者の社会文化習俗の価値観を決めるものではなく、トルコ石の持つ自然属性と密接な関係がある。また、使用者とその自然属性に対する十分な認識を基に、相応しいトルコ石の特性をもった装飾品と技術が創られ、象嵌技術はまさにその技術の集大成であると言えることができる。

4. 新石器時代後期の象嵌技術とトルコ石象嵌

西北地区の新石器時代後期の馬家窯-齐家文化時期は、トルコ石装飾品を除き、骨片を張り付けた象嵌技術がみられ、例えば鴛鴦池墓地のM6では、鋸歯形の骨片が褐色の粘着剤を用いて貼り付けられているものが発見された。粘着面は粗雑であり、表面には光沢をもっている。M33では、一組の骨片群が発見され、報告では上面に「アラブ」樹脂の粘着剤が用いられているとあり、骨片はおそらく本来粘着剤でひと固まりになっていたのであろう。

寧夏回族自治区菜園遺跡では、馬家窯文化の墓地QM52でも丸餅形黒色膠状物質に8つのトルコ石が象嵌された装飾品が発見されている。トルコ石片は多角形で、石片は大小さまざまで表面には光沢があり、厚さは0.1~0.15cm、更にトルコ石の垂飾が1点発見されている¹⁸。

甘肅省広河県地巴坪半山類型墓地では、66基の墓が発掘され、副葬された装飾品の大多数が骨珠と骨製の腕飾りであった。342点の骨珠は7基の墓に埋葬された人骨の頸部と手から腕にかけての部分からそれぞれ出土しており、12点

の骨製腕飾りは5基の墓から出土している。ここからはトルコ石の装飾品はないものの、12点の骨製腕飾りはやや特殊な性質のものとして注目される。このような骨製腕飾りは、我々がよく見る骨製の腕輪ではなく、多くの細かな骨片が黒色膠状のもので貼り付けられて成形されているものである。手から腕にかけての部分から出土し、左右とも各1点ずつである。大部分は保存状態が悪く、黒色の膠状のものは判断できないほどすでに消失している。保存状態の良い骨片は、長さ2cm、幅1.4cmとサイズや厚みがほぼ均等で、長方形を呈する。骨片の切断面は磨かれており、接合面は粗雑で黒色の粘着物も出土している¹⁹。鴛鴦池馬廠類型遺跡のM51では、石彫人頭像1点が、被葬者の左腕付近から出土している。石質は白雲石であり、片状で楕円形の顔、額には穿孔があり、人頭像に間違いない。目と口は円形を呈し、鼻の穴はふたつ、内側にはよくわからない黒色膠状の粘着剤で骨珠が象嵌されている。顔の長さは3.8cm、幅2.5cmとなる。同様に鴛鴦池墓地M58からも骨製の腕飾りが出土しており、上述の地巴坪半山類型墓地と同様、多くの切って磨かれた長方形の骨片が黒色膠状のもので貼り付けられて円筒状に成形されており、人骨の左上腕部に配されていた²⁰。同墓地のM32では、2点の精美な骨製簪が発見されており、1点は丸い棒状の簪の尾部に黒色膠質のモノが円錐形に成形されており、もう1点は黒色膠質のモノの上に36枚の小さな骨珠が貼り付けられており尾部の先端には楕円形の骨片が象嵌されている。骨片上には刻線で5つの同心円紋飾が描かれている(図24)。

甘肅省の五壩遺跡からも、同じように細長い骨片で象嵌によって作成した腕輪が検出されているが、齐家文化の磨溝遺跡から検出された骨製の腕輪は象嵌ではなく、二分割になった腕輪であった。このほか、青海省同徳県に位置する宗日遺跡では、被葬者の右腕に装着された骨製品の腕輪には、不規制なトルコ石片が象嵌され

¹⁸ 寧夏文物考古研究所・中国歴史博物館考古部『寧夏菜園』、科学出版社、2003年。

¹⁹ 甘肅省文物考古研究所「広河地巴坪半山類型墓地」『考古学报』1978年第2期。

²⁰ 甘肅省文物考古研究所「広河地巴坪半山類型墓地」『考古学报』1978年第2期。

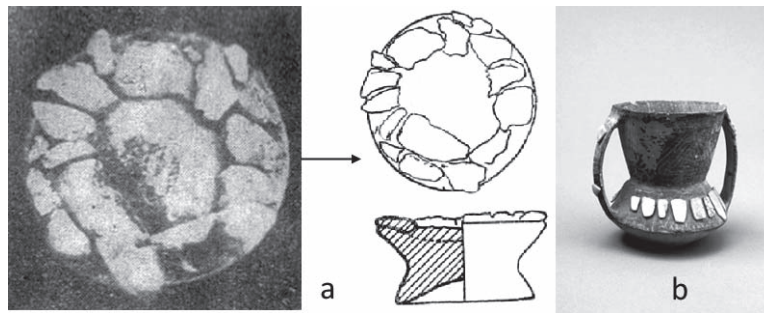
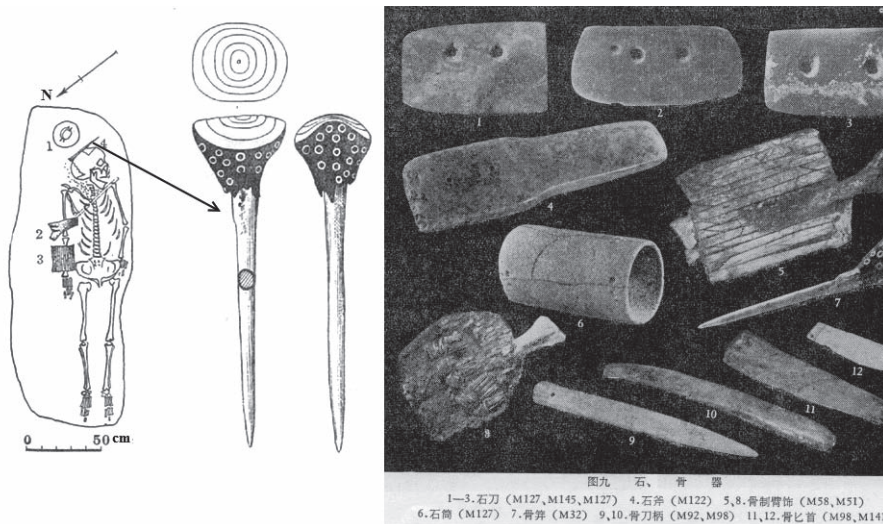
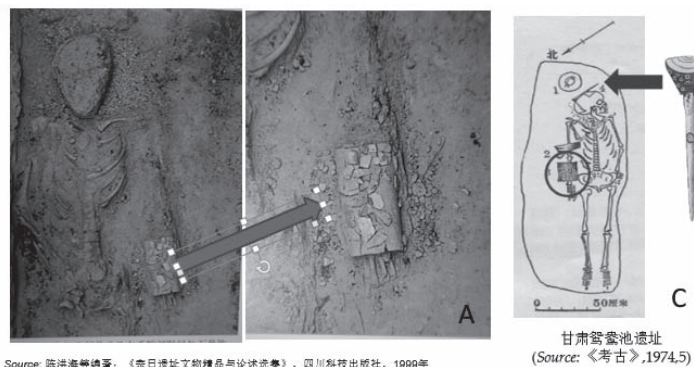


図23 店河遺跡 (a) と四壩文化 (b) 出土のトルコ石象嵌土器



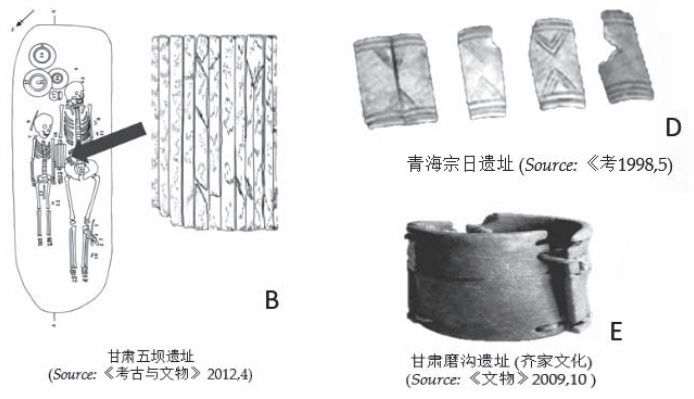
图九 石、骨器
1—3. 石刀 (M127, M145, M127) 4. 石斧 (M122) 5, 8. 骨制臂饰 (M58, M51)
6. 石筒 (M127) 7. 骨葬 (M32) 9, 10. 骨刀柄 (M92, M98) 11, 12. 骨匕首 (M98, M141)

図24 鴛鴦池墓地出土骨製象嵌装飾品



Source: 陈洪涛等编著:《宗日遗址文物精品与论述选集》, 四川科技出版社, 1999年

甘肃鸳鸯池遗址 (Source:《考古》,1974,5)



甘肃五坝遗址 (Source:《考古与文物》2012,4)

甘肃磨沟遗址 (齐家文化) (Source:《文物》2009,10)

図25 宗日遺跡 (A,E) と五壩遺跡 (B)、鴛鴦池墓地 (C)、磨溝遺跡 (D) 出土の骨片とトルコ石象嵌

ていた(図25)。

青海省西寧市朱家寨墓地もまたトルコ石装飾品が出土している。25基の墓から11点のトルコ石と2点の骨片を象嵌した装飾品が出土している。トルコ石飾りは主に垂飾、珠類と薄片となる。M41の薄片は黒色の鉍脈石上に象嵌されていた。また、M6の鋸歯状骨片はある面は光沢があり、またある面は粗雑であり、粗雑面上には黒色の膠状物が確認される²¹。

その後の齐家文化期では、更にトルコ石を象嵌した土器が出現している。寧夏回族自治区固原市店河遺跡齐家文化期で発見された2点の土器には、トルコ石を象嵌して装飾している。M1:10は胴部がくびれた土器で、出土時にはトルコ石が土器から外れていたが、もう1点のM2:7は保存状態が完全であった。M1出土土器と同様の型式であり、土器表面に17枚のトルコ石薄片が貼り付けられ、トルコ石片の長さは2.8cm、幅は1.3cmとなる²²。更に時期が下った四壩文化期からは、橙黄色の土器肩部にトルコ石を象嵌した装飾土器が出土しており、橙黄色とトルコ石を組み合わせた装飾効果は大変鮮やかなである²³(図23)。

内蒙古自治区および東北地区一帯では、BC4500~3000年の紅山文化に属する遺跡からもまたトルコ石装飾品が見つかる。牛河梁第16地点4号墓は、出土した遺物すべてがトルコ石であった。当該墓地から出土したトルコ石垂飾はその造形が特徴的で、彫琢工芸技術が優れており、紅山文化における彫像技術の高さを代表するものである。紅山文化の遺跡では、内蒙古自治区通遼地区で発見されたトルコ石の蚕の蛹、阜新蒙古族自治县胡頭溝墓地出土のトルコ石の魚もまた、大変特色のある動物型装飾品となる²⁴(図26)。

山東地区もまた新石器時代にトルコ石が出土



図26 紅山文化二枚貝象嵌と蚕の蛹形トルコ石垂飾

し、象嵌技術が見られる地域のひとつである。王因墓地は大汶口文化に属し、計18点のトルコ石垂飾と2点の骨片で製作された腕輪が出土している。但しこれらの骨片は、黄河上流域で見られるような黒色膠状物で貼り合わせたものではない。2、3のまとまりに分けられ、上下両端は穴があげられており、紐状のもので繋ぎ合わせて腕輪として用いたのであり、明らかに地域間の技術面での差異が見られる²⁵。大汶口墓地は大汶口文化前中後期に分けられる。前期の中型墓葬からはトルコ石の垂飾が1点しか出土しておらず、中期の中型墓であるM22出土の3点のトルコ石象嵌の指輪は非常に精美である。後期の大型墓M10は、トルコ石を象嵌した筒状骨製品以外は、19個のトルコ石を組み合わせたネックレスが発見されている。トルコ石を象嵌した筒状骨製品もまた、M4で1点発見されており、高さは7.7cm、表面は磨かれて光沢があり、円形のトルコ石が5つ嵌め込まれている。小型墓M5からはトルコ石の耳飾りが1点出土している²⁶。同省鄒県野店大汶口文化後期の墓地からは、トルコ石の垂飾4点、彫刻を施した骨と象牙製筒が4点見つかり、その中でM61とM62それぞれの筒には、上下両端の紋様の間にそれぞれ細かなトルコ石が4

²¹ (瑞典)安特生著(劉光文訳)『西寧朱家寨』、青海人民出版社、1991年。

²² 寧夏文物考古研究所「寧夏固原店河齐家文化墓葬清理簡報」『考古』1987年第8期。

²³ 甘肅省政府『甘肅日報』2013年7月23日。

²⁴ 郭大順「從紅山文化綠松石飾件想到的」『華夏收藏網』2010年10月19日。方輝「東北地区出土綠松石器研究」『考古与文物』2007年第1期。

²⁵ 山東省文物考古研究所『山東王因』、文物出版社、2001年。

²⁶ 山東省文物考古研究所『大汶口』、文物出版社、1974年。

つ象嵌されていた²⁷。このほか同省臨朐県朱封遺跡の龍山文化の大墓からは、透かし彫りの王冠にトルコ石が象嵌されていた(図27)²⁸。

黄河中流域に位置する山西省陶寺文化下靳墓地では、3点のトルコ石象嵌されたブレスレットが、被葬者の手から腕にかけての部分から発見された。これらトルコ石の象嵌は黒色膠状物上にあるが、腐朽してどのような物質であるかは判断できない。但し、その形状は腕輪であることは疑いない²⁹(図28)。

陶寺墓地では、8基の墓葬からトルコ石象嵌腕輪が8点出土している。大型から中型墓に性別は問わず、被葬者の右腕に装着されていた。象嵌片のトルコ石は最大2.3cm、最小0.2cmで、厚さは0.03~0.15cmであり、表面は磨かれ光沢があるものの、裏面は黒色膠状物質が確認できる。報告者は、このようなトルコ石象嵌腕輪をI型の円形円筒形とII型の長方形の2種類に分類している³⁰(図29)。

陶寺墓地ではトルコ石象嵌腕輪の他に、24組の玉石器を象嵌した装飾と骨製簪を組み合わせた頭飾り及び散乱したトルコ石片900点余りの資料も検出された。24組の組み合わせ頭部装飾品は、24基の墓からそれぞれ一組ずつ出土している。その中の10組はトルコ石の象嵌が施されており、象嵌されたトルコ石ごとの枚数は、数10~60片と異なる。発掘者の高煒氏は3型式に分類している。I型はM2010から玉飾り3点、骨製簪1点とともに出土している。骨製簪にはトルコ石が27枚象嵌され、トルコ石の下には黒色の膠状物が認められる。簪と環が交わる箇所にも漆または樹脂類で固定されている(黒色の

炭化物が認められる)。M2001は玉飾り2点と骨製簪1点の組み合わせで、骨製簪に象嵌されたトルコ石は26枚、M2028は玉飾り3点、骨製簪1点の組み合わせで骨製簪に象嵌されたトルコ石は10枚、M3018は玉飾り3点、骨製簪1点の組み合わせで骨製簪に象嵌されたトルコ石は26枚となる。II型はI型に比べて多く、1点はL字型の玉飾りが黒色膠状物でトルコ石が象嵌されていた。M2023の骨製簪には60枚にもなるトルコ石が象嵌されていた³¹。III型にはトルコ石の象嵌は見られない。高煒氏は似たような漆或いは樹脂や膠状の黒色粘着物が骨製簪の尾部にトルコ石を象嵌するために大変重要な素材であったと指摘している。またそれはトルコ石を象嵌するうえで必要不可欠なものであり、そのような粘着剤はどのような素材なのであろうか。齐家文化で発見された同類の粘着剤と同じように、化学分析による解明が必要となる。つまり、この種の粘着剤は一種の自然生成物であり、トルコ石と同様に産地の問題もある。この分析結果は、まさに我々がこうした地域からなぜ象嵌技術が出現したのか、また他の地域で象嵌技術が見られない背景を理解するうえでの助けとなる。

陶寺文化の遺跡がトルコ石象嵌装飾では、いまのところ知るなかで二里頭遺跡を除いて出土点数が最も多い遺跡である。

このほか、陝西省北部の石峁遺跡と山西省運城市の清凉寺遺跡でも玉璧上にトルコ石が象嵌されているものが発見されている。ここで発見された象嵌と山東地区の玉鉞、冠飾りと象牙製筒上の象嵌とは同様で、単体象嵌の特徴となる³²(図30)。

但し、龍山文化期になると山東省日照市兩城鎮遺跡の墓でも人骨の上腕部にトルコ石が象嵌された牌飾が発見されている。象嵌本体は不明であるが、図31に見るように、象嵌片の形状は

²⁷ 山東省文物考古研究所『鄒县野店』、文物出版社、1980年。

²⁸ 中国社科院考古研究所山東隊「山東臨朐朱封龍山文化墓葬」『考古』1990年第7期。杜金鵬「論臨朐朱封龍山文化玉冠飾及相关問題」『考古』1994年第1期。山東省博物館・良渚博物院編『玉潤東方—大汶口・龍山・良渚玉器文化展』文物出版社、2014年、済南市。

²⁹ 山西省臨汾行署文化局・中国社会科学院考古研究所山西工作隊「山西臨汾下靳村陶寺文化墓地发掘報告」『考古学報』1999年第4期。山西省考古研究所「山西臨汾下靳陶寺文化墓地发掘」『考古学報』2005年第3期。

³⁰ 中国社会科学院考古研究所・山西省臨汾市文物局編著『襄汾陶寺—1978~1985年考古发掘報告』第一冊~第四冊、文物出版社、2016年、北京。

³¹ 高煒「龍山時代玉骨組合頭飾の復原研究」『海峡兩岸古玉学会論文專輯I』国立台湾大学理学院地質科学系2001年。

³² 陝西省榆林上郡博物館・李建飛編『上郡博物館』2012年。陝西省考古研究院など編著『発見石峁古城』、文物出版社、2016年、北京。

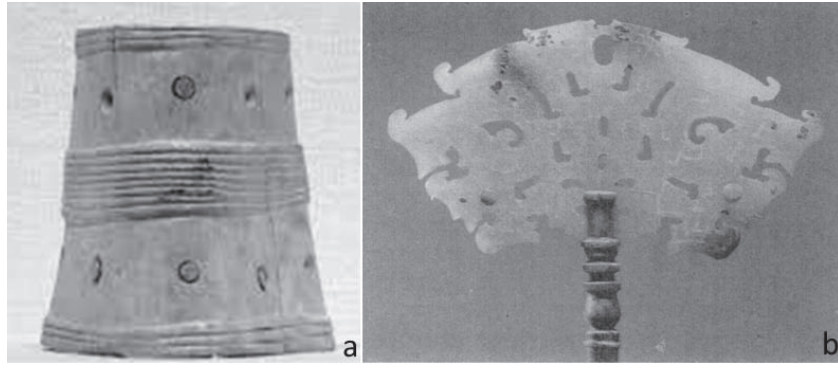


図27 大汶口文化 (a) と龍山文化 (b) 出土のトルコ石象嵌

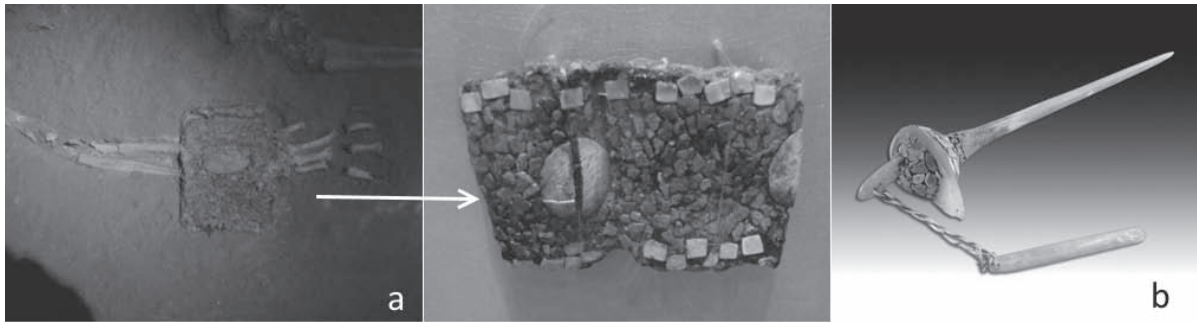
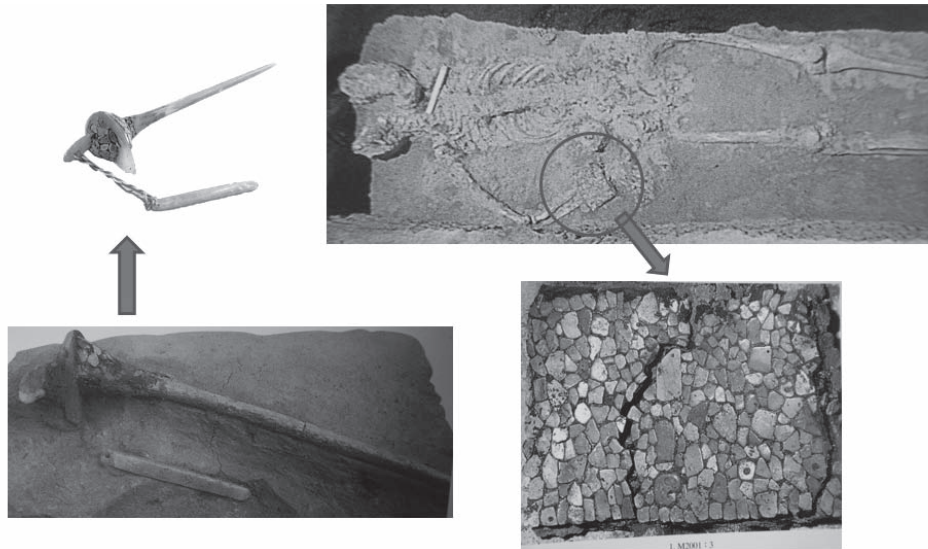


図28 陶寺文化出土のトルコ石象嵌装飾品 (下靳墓地)



Source:中国社会科学院考古所、山西省考古研究所《襄汾陶寺——1978—1985年發掘報告》文物出版社2015

図29 陶寺文化陶寺墓地出土のトルコ石象嵌

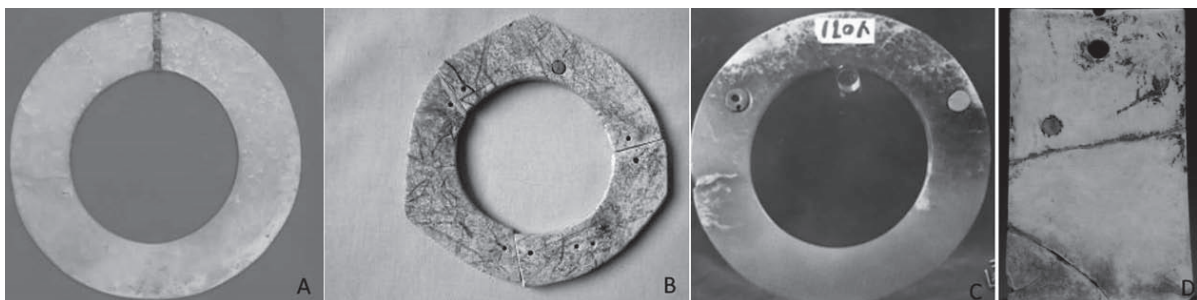
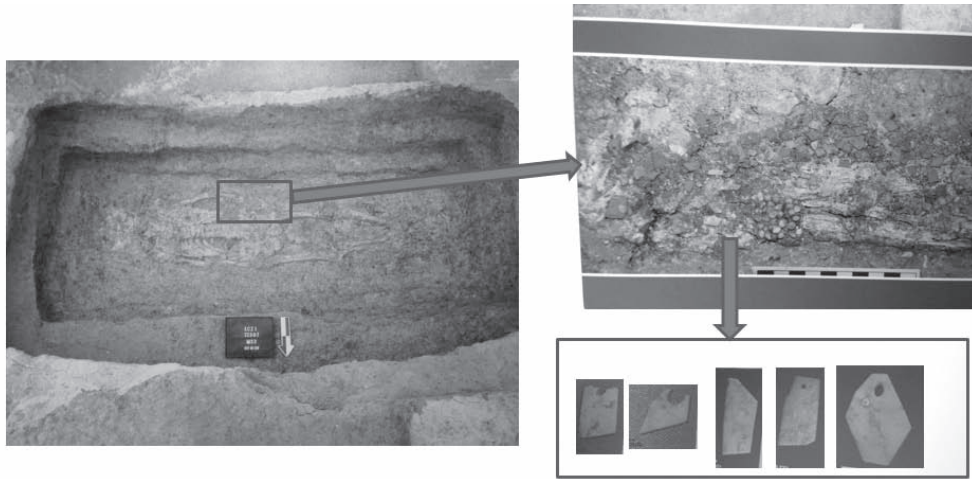


図30 清凉寺遺跡 (A、B)、石峁遺跡 (C) と山東省新石器時代 (D) 出土のトルコ石象嵌



Source: 本图作者2016年2月拍于山东大学博物馆，嵌片引自栾丰实先生的研究

図31 兩城鎮遺跡出土のトルコ石象嵌牌飾

腕を飾る装飾品だと見出すことができる³³ (図31)。

新石器時代において玉器で著名な良渚文化が分布する江蘇・浙江省地域では、普遍的ではないものの、ある特定の遺跡でもまたトルコ石或いは玉器に象嵌したものが発見されている。卞家山遺跡は莫角山北部ちかくに位置し、ここでは墓から大量の漆木製品が発見され、その中には漆器上に玉珠を大変きれいな図案に組み合わせて象嵌している。このほか新地里、反山や瑶山といった墓地でもまた、トルコ石象嵌片が発見されている。上海に位置する福泉山遺跡と江蘇省の邱成墩遺跡、および江蘇省北部の花厅遺跡と凌家滩遺跡でもトルコ石象嵌片が見つまっている。これらの遺跡では象嵌となった嵌体はみられないが、保存が難しい漆木製品であろうと考えられる³⁴ (図32、図33)。

³³ 栾豊実2016年香港中文大学中国芸術考古研究センターシンポジウムよりご提供。

³⁴ 安徽省文物考古研究所『凌家滩—田野考古発掘報告之一』文物出版社、2006年。
南京博物院編『花厅—新石器時代墓地発掘報告』、文物出版社、2003年。上海市文物管理委員会編著『福泉山—新石器時代墓地発掘報告』、文物出版社、2000年。

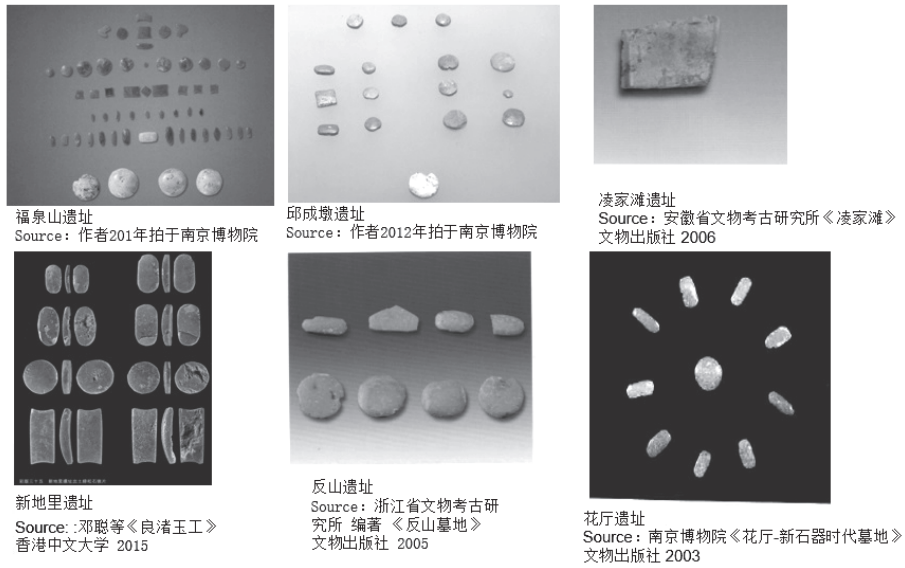
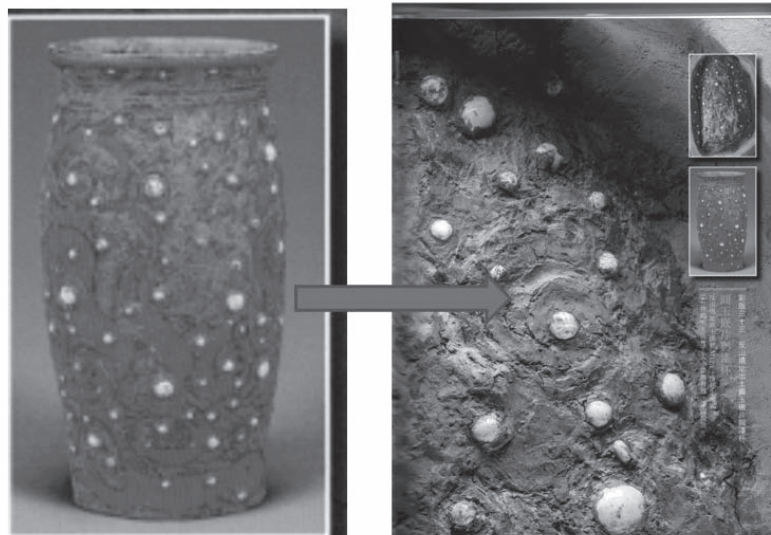


図32 長江下流域新石器時代出土のトルコ石象嵌片



Source: 邓聪等《良渚玉工》香港中文大学 2015和《反山》文物出版社 2005

図33 卞家山遺跡出土の玉珠象嵌漆器

第三章 初期青銅器時代のトルコ石装飾品と象嵌技術の発達

1. 二里頭文化期と二里崗文化期のトルコ石と象嵌

中国古代の伝統的な儀礼祭祀用品は、青銅器が誕生する前は陽起石や透閃石などの軟玉が主な原材料であった。この伝統は、中国では多くの品質の良い軟玉が採れることと関係が深く、更に古代中国の玉器に対する認識とも深い関係があろう、一般的には鉍石の玉器は貴重で入手困難な宝石というだけでなく、人体の健康にも有益で、人類と天地を繋ぐ霊的な特殊な産物であると考えられている。そのため、大変早くから社会的身分の象徴として、装飾品や祭祀性の儀礼活動に用いられてきた。特に新石器時代では、各種の玉器は非常に重要な社会、文化的な意義の重責を担っており、人々の精神文化や社会身分の代表的な象徴物となっていた。このことと比べると、トルコ石はそんなに重視されるようなものではなく、小型の装飾品として一般的な洒落や耽美の飾りとして、祭祀儀礼の性格をもった政治社会的な意義は見られない。このことは、その多くが小型原石であることと関係がある。新石器時代後期から始まり、象嵌技術が出現するにつれ、小さなトルコ石の特徴は却って重要な効果を発揮し有利な要因となる。特に二里頭、二里崗文化の青銅器時代に入ると、玉器が依然として祭祀性の儀礼用品として表現されているにも関わらず、はるか新石器時代に発揮していた威力ほどにはない³⁵ (図34)。逆に新石器時代には人目を引くことがなかったトルコ石が象嵌技術と青銅器技術の異常な発達によって、却って玉器に取って代わり、この時代の祭祀儀礼の中心に位置づけられる。但し、二里崗文化期に入ると、少なくとも鄭州商城や偃師商城などの大型遺跡には、二里頭遺跡に見られるようなトルコ石装飾品や象嵌製品はこれまで見られなかった。2016年になってようやく、長江中流域の盤龍城遺跡楊家湾墓地に

トルコ石象嵌品が発見され、こうした空白期間が打破されることとなる。いまのところ盤龍城遺跡では、トルコ石象嵌が1点発見されたということであるが、筆者の調査では、実際にはこの1点だけでなく、楊家湾からは、未発表ではあるが多くの鳥形や動物形トルコ石象嵌が発見されている³⁶。

幹骨崖遺跡は甘肅省酒泉市の豊楽河東側に位置し、馬廠文化～四壩文化まで継続した墓地遺跡である。これらの墓葬からは大量の装飾品が出土し、トルコ石は主に管玉や珠玉といった垂飾類、瑪瑙は管玉のほか、算珠形や菱形といった形状がみられ、未使用の原料も大量にある。その他、蛍石類、岩石類や煤玉類も少量ながら存在する。また同時に、墓葬からは貝類の装身具、土製の管玉や石製の管玉・珠玉も大量に検出されている。注意すべきは、トルコ石製品は象嵌片ではなく、管玉と珠玉だということである³⁷ (図35)。

尕馬台遺跡は青海省貴南県の海南自治区に位置し、馬家窯文化～齐家文化までの遺構が検出されている。副葬品としての装身具が大量に出土しているが、その素材は石製の腕輪やネクレス、耳飾りと骨製の管玉、腕輪、簪などが主であり、トルコ石製品は見られない。齐家文化後期に相当する初期青銅器時代の墓葬44基を発掘し、トルコ石や海産の貝類が大量に出土したほか、骨製の珠類も大量に見つかっている。特にM25から検出された青銅鏡が最も有名であり、その他、青銅製の腕輪や指輪、耳飾りなどが検出されている。基本的に装身具の組み合わせは、トルコ石、海産貝や骨製珠などであるが、トルコ石珠を検出した墓葬は44基中で16基と、全体の3割を占めている。この墓地でも幹骨崖

³⁵ 中華玉文化研究中心・中華玉文化工作委員会編『玉魂国魂—玉器・玉文化・夏代中国文明展』、浙江古籍出版社、2013年、杭州市。

³⁶ 湖北省博物館・盤龍城遺跡博物館・武漢博物館、万琳・方勤主編『南土遺珍—商代盤龍城文物集翠』、長江出版伝媒・湖北教育出版、2016年。

³⁷ 甘肅省文物考古研究所・北京大学考古文博学院編著『酒泉幹骨崖』、文物出版社、2016年。遺跡の年代は馬廠文化後期 (BC2000)、四壩文化 (BC1800-1500)。



図34 新石器時代から初期青銅器時代のトルコ石装飾品と象嵌装飾品分布



図35 幹骨崖墓地から検出されたトルコ石管珠玉と瑪瑙、滑石珠

墓地と同様に、トルコ石製管玉と珠玉が主体であり、象嵌片はなかった³⁸。

(1) 二里頭遺跡から発見されたトルコ石および象嵌

二里頭文化は中国初期青銅器時代の代表であり、二里頭遺跡は中国ではじめての王朝国家の産物であるだけでなく、中心地でもある。研究者たちの研究によると、二里頭文化の装飾品のなかでトルコ石装飾品は二里頭文化の玉器類全体を通じて、垂飾やネックレス類があるが、大部分はやなり象嵌品である。二里頭文化第3期からは計980点のトルコ石が発見された。このほかVIKM3からは片側に一列配されたトルコ石片が発見されている。範囲は長さ25cm、東西幅6cmとなる。発見された3点のトルコ石を象嵌した青銅牌飾を除き、二里頭文化第3期からは更に5点のトルコ石象嵌の円形銅器が発見されているが、用途は不明である。VKM4:2では、円形器の周りに61点のトルコ石が象嵌されており、均等に配列され、まるで時計の文字盤のようである。その間には十字形のトルコ石片が2重にそれぞれ13点ずつめぐっている。正面には6層にもなる太さが異なる織物が充填されており、直径は17cmとなる。VIKM3:16は周りをトルコ石片の象嵌でめぐらせ、厚さは約10.3cm、直径11.6cmとなる。80YLⅢ M4では、更にトルコ石象嵌の器物が出土している。二里頭文化第4期の84YLⅣ M6からは計150枚ものトルコ石片が発見されており、もともと有機物に象嵌されていたものであろう(図36)。

このことから二里頭遺跡を見ると、通常見られるトルコ石装飾品を除き、特に注目されるのはトルコ石象嵌であろう。その数量の多さは注目に値するものである。二里頭文化1～4期を通じて計10点余りのトルコ石象嵌が発見されており、更に多くのカウントできないトルコ石象嵌片も含まれる³⁹。2006年にトルコ石を龍形に

象嵌した画が発見されたのち、更におよそ1000㎡にもおよぶ大量のトルコ石廃材のあるトルコ石製作工房が発見された⁴⁰。

これらの考古資料は研究者たちをトルコ石、および独特な象嵌技術に注目させることとなる(図37)。二里頭遺跡を除いて、甘肅省天水市においてもトルコ石象嵌の青銅牌飾が1点発見されており、甘肅省天水博物館に収蔵されている。長さ15cm、幅10cmで、眼の上は羊首紋となる⁴¹。四川省広漢市三星堆高駟鎮より、長さ12.3cm、幅5cmで表面にはぎっしりと幾何学紋様が施されている青銅牌飾が出土しており、同地区の真武鎮からは、長さ13.8cm、幅5.2cmで、銅の縁取りのあるトルコ石牌飾が出土している。この2点は形状と風格から二里頭遺跡出土のものと同様に酷似している⁴²。

(2) 二里頭遺跡出土トルコ石の産地推定

中国で有名なトルコ石の産地は湖北省西部になる。ここでは計60か所余りの鉱脈地が発見されており、その中で最も規模が大きいのは鄖県雲蓋寺鉱床となる。ここは、南北とその中間の大きく三つの鉱石帯に分けられる。このほか陝西省、河南省、青海省、新疆ウイグル自治区と安徽省にも鉱脈が発見されている(図38)。

二里頭遺跡2004VH290から出土したトルコ石の原料をみると、トルコ石の厚さはどれも1cm以下のものが少なくなく、最も薄いので僅か0.1cmとなる。トルコ石は原形のままで鉄とマンガンが付着していた。H290では数千点にもなるトルコ石が発見されている。大部分は人工的に加工された痕跡があり、時期は二里頭文化の第4期後段に属する。使用年代はおおよそ第3期で、象嵌片から発達した象嵌技術が観察できる。ここでの製品は大部分がトルコ石の管、

³⁸ 青海省文物考古研究所・北京大学考古文博学院編著『貴南朶馬台』、科学出版社、2016年。

³⁹ 陳雪香「二里頭遺址墓葬出土玉器探析」『中原文物』2003年第3期。郝炎峰「二里頭文化玉器的考古学研究」『中国早期青銅文化』科学出版社、2008年。

⁴⁰ 李存信「二里頭遺址緑松石龍形器的清理与仿制復原」『中原文物』2006年第4期。

⁴¹ 張天恩「天水出土の獸面銅牌飾及有关問題」『中原文物』2002年第1期。陸思賢「二里頭遺址出土飾牌紋飾解讀」『中原文物』2003年第3期。

⁴² 杜金鵬「広漢三星堆商代銅牌飾淺説」『中国文物報』1995年4月9日。成都金沙博物館・中国社会科学院考古研究所編『玉匯金沙—夏商時期玉文化特展』、四川人民出版社、2017年、成都。

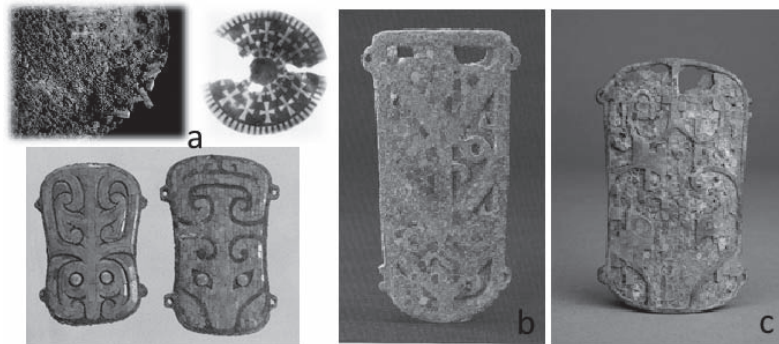


図36 二里頭遺跡 (a)、三星堆遺跡 (b)、天水博物館 (c) 出土のトルコ石象嵌牌飾

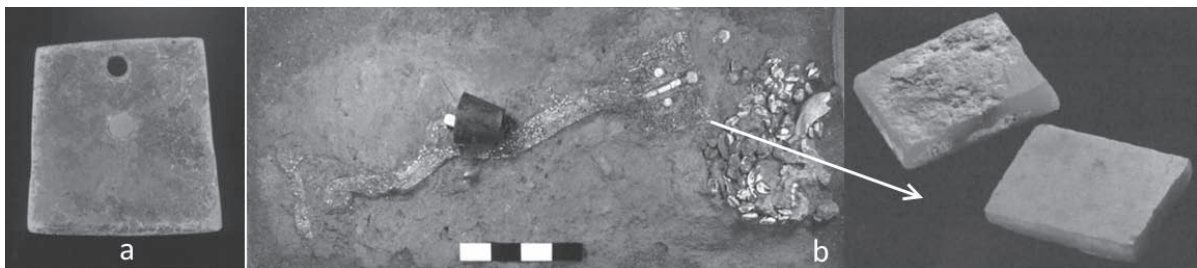


図37 二里頭遺跡出土のトルコ石象嵌 (鄧聡2010より引用)

珠及び象嵌片であり、製作と密接に関係する。計3999点ものトルコ石の廢材、未成品と製品が発見されている。ここでの象嵌片の研究によると、主に打製により、小型石片を使用し、管と珠類はやや大きな塊を用いている⁴³ (図39)。

それでは、これらトルコ石の原料の産地はどこにあるのか？産地についての自然科学分析は、いまのところ以下の数種類がある。二里頭遺跡の研究者は銅同位体比、TIMS (表面電離型質量分析計) と MC-ICP-MS (誘導結合プラズマ質量分析) から自然界の銅鉛床の差異を分析する。いまのところ中国人研究者は河南省舞陽県賈湖遺跡、湖北省丹江口市泰山廟墓群吉家院墓地および同省鄖県喬家院墓地などの遺跡から出土したトルコ石について分析を行っている。二里頭遺跡のトルコ石の産地については、雲蓋寺、秦古と文峰という3か所の典型的な鉛床のサンプルから比較した。SEM (走査型電子顕微鏡)、XRD (X線回析)、EPAM (電子線マイクロアナライザー)、FTIR (フーリエ変換赤外分光法) や MC-ICP-MSを用いて二里頭

遺跡出土のトルコ石産地の分析を実施した。湖北省を主体とするトルコ石鉛床は、南北方向に大きく三つの鉛石帯に区分され、トルコ石の主な分布は構造線の方位がすべて北西に向いた南北それぞれの鉛石帯にあり、中央の鉛石帯には僅かに分布するのみである。湖北省、河南省と陝西省のトルコ石の鉛床分布は多い。二里頭遺跡は北鉛石帯以北に位置する。遺跡出土サンプルと雲蓋寺採取の鉛石サンプルデータの比較分析では、特に銅同位体組成分析による16点の分析結果が明らかになっており、それによると、二里頭遺跡出土トルコ石と雲蓋寺のサンプルの銅同位体比較は一致している。このことは、雲蓋寺の鉛石が二里頭遺跡のトルコ石鉛石の原料のひとつであったことを示している。二里頭遺跡のトルコ石が北鉛石帯と密接な関係にあることは、陝西省南部商洛一帯で新たに発見された洛南トルコ石鉛石との関係の可能性も暗に意味しており、新発見が公表と自然科学分析研究が進むにつれ、こうした予察的な見解の実証が期待される。つまり、二里頭文化時期は商洛一帯の丹江流域で多くの重要な遺跡が発見されており、二里頭遺跡から出土したものに匹敵するような美しさの牙璋などといった祭祀性の玉器や

⁴³ 中国社会科学院考古研究所編著『二里頭—1999～2006』第一冊～第五冊、文物出版社、2014年、北京。

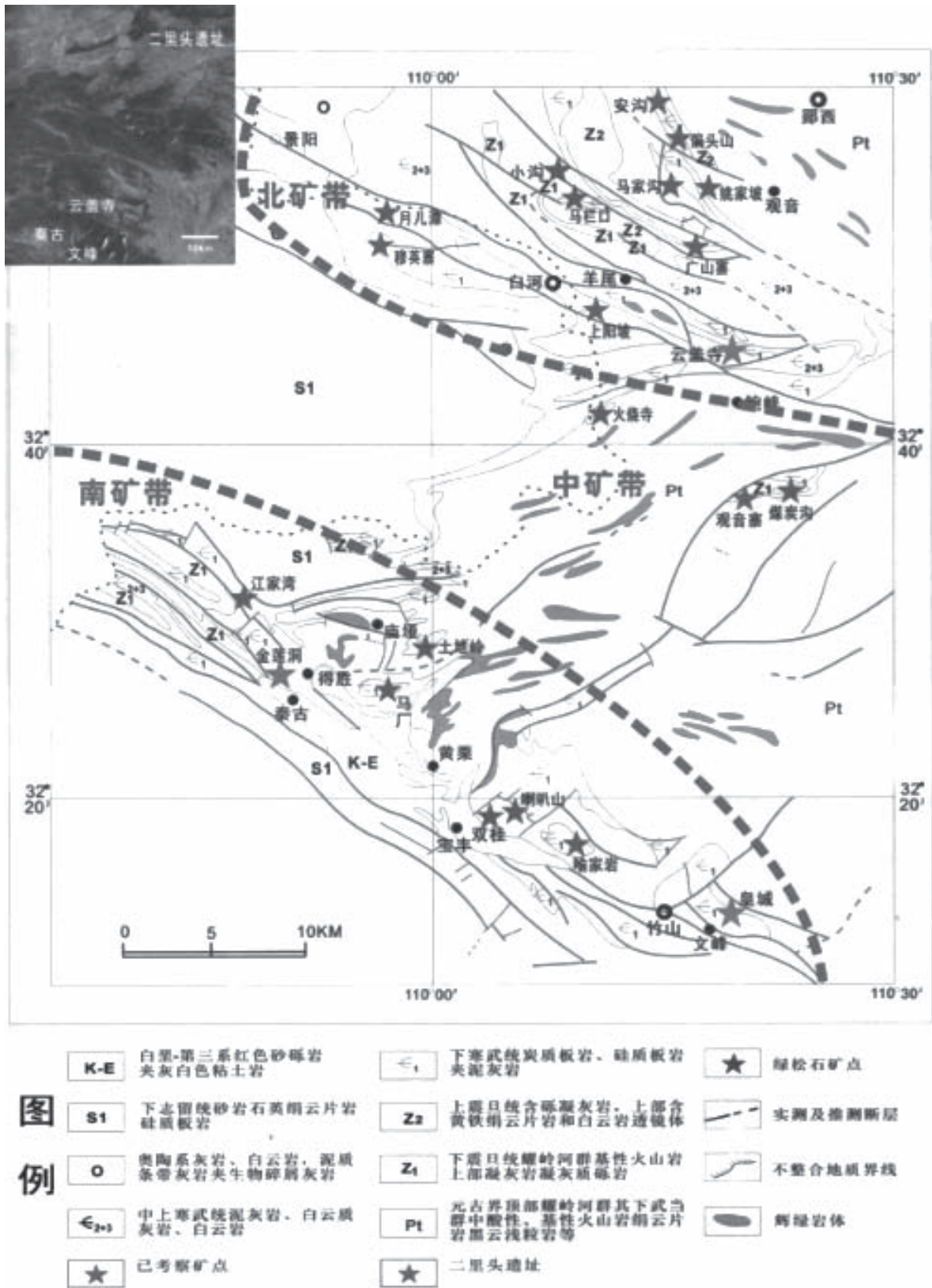
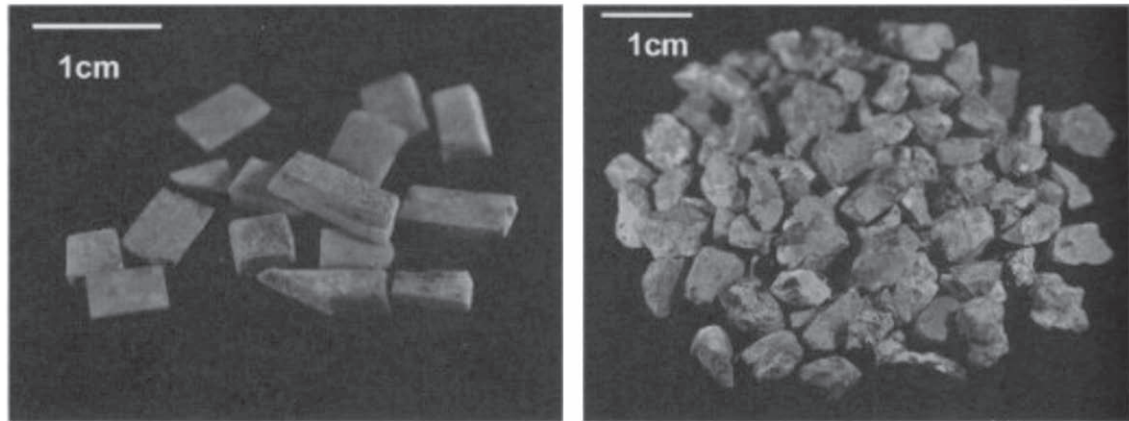


图38 二里头遗址出土トルコ石産地分析—北鉱石帯見取り図（中国社会科学院考古研究所編2014より引用）



a. 3号墓出土的綠松石嵌片

b. 灰坑 H290 出土的綠松石料

図39 二里頭遺跡出土トルコ石象嵌片とトルコ石原料（中国社会科学院考古研究所編2014より引用）

儀礼色のある土器が出土しており、それは二里頭遺跡との密接な関係もしくはトルコ石鉱石源かもしれない⁴⁴。

2. 二里崗文化期のトルコ石象嵌

2016年に武漢大学考古学研究室と湖北省文物考古研究所および盤龍城遺跡博物館が合同で発掘調査隊を組織し、楊家湾墓地で龍形のトルコ石象嵌品を1点発見した。象嵌体は不明で実際の用途は明らかでないが、写真からわかるのは、木質に漆を施した素材に象嵌した祭祀用具だということである。龍形の眼と口は金箔が施されており非常に人目を引く（図40）。このほか、2017年に盤龍城遺跡を調査した研究者によると、90年代初頭に楊家湾調査の担当となり、1999年度に発掘調査した楊森森氏によると、当時の実測図ではM3の墓葬内北側に鳥形のトルコ石象嵌製品が1点副葬されている⁴⁵。しかし、すでに発表された簡報にはその報告がなく、その理由は知る由もないが、こうした龍形の象嵌が発見されるにつれて、遠くはない将来、詳細な報告ができることを期待している。

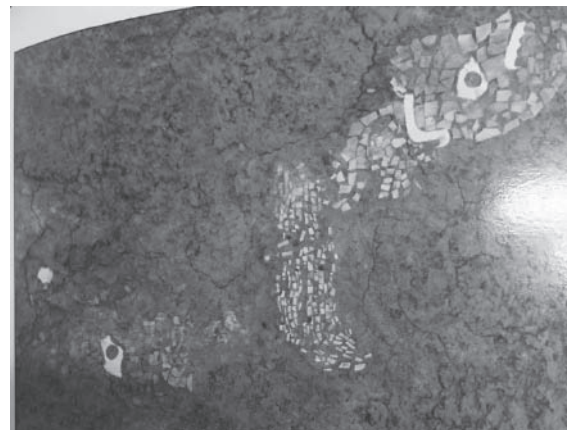


図40 盤龍城楊家湾墓地から検出されたトルコ石象嵌牌飾（「2015年中国考古10大新發現」中国文物報2016年4月より引用）

3. 海外所蔵の二里頭文化期のトルコ石象嵌伝世品

海外の博物館所蔵品にも数点のトルコ石が象嵌された青銅牌飾が発見されており、それぞれ紹介する。

1) Sackler 博物館（アメリカ）

収蔵品1：長さ17.2cm、幅11.3cm

収蔵品2：長さ15.9cm、幅9.8cm

収蔵品3：長さ26.6cm、幅12.2cm

※頂部に圭首が取り付けられている。

2) Paul Singer所蔵。長さ14cm

3) MIHO博物館（日本）収蔵品。長さ15cm、幅8.5cm

4) Honolulu芸術学院（アメリカ）所蔵品。長さ16.5cm、幅8.6cm

⁴⁴ 陝西省考古研究院・商洛市博物館編著『商洛東龍山』、科学出版社、2011年。

⁴⁵ 湖北省考古研究所、方勤主編、孟華平・羅運兵副主編『三苗と南土—湖北省文物考古研究所“十二五”期間重要考古収獲』、江漢考古編集部、2016年、武漢市。中華玉文化研究中心・中華玉文化工作委員会編『玉魂—紅山文化玉器精品展』、浙江古籍出版社、2009年、杭州市。

※眼上に高くそびえるような多羽紋がある⁴⁶。

これら海外の博物館所蔵品の出土地は不確定であるが、その製作技術と芸術的な風格ならびに獣面紋の境地から見ると、二里頭文化期の製品であろうと指摘する研究者もいる。このことから、トルコ石象嵌技術は二里頭文化期における明らかな特徴のひとつである。

4. 二里頭遺跡のトルコ石象嵌技術

出土遺物の研究によると、二里頭遺跡で発見されたトルコ石象嵌技術は、おおよそ以下の三種類の状況が見られる。つまり、第1種：青銅製品或いは牌飾上に象嵌するもの、第2種：有機質器物に象嵌するもの、第3種：玉器に象嵌するものである。第1種は円牌状青銅製品と青銅牌飾に見られる。特に1987年に二里頭遺跡Ⅵ区M57より青銅牌飾が1点出土した際、鑄銅の獣牌形の枠組みだけであり、その上に細かなトルコ石が現位置を保って覆いかぶさるように其の上に並んでいた。この牌飾は長さ15.9cm、幅7.5～8.9cm、象嵌されていたトルコ石は400点余りで緻密に秩序だてて配列され、象嵌はしっかりしていた。別の1点はⅤ区M4出土のトルコ石象嵌青銅牌飾であり、320点余りのトルコ石片が組み合わせり、その形状は長方形、梯子形と円錐形となる。第2種は発見された龍形器である。2002年に発見された「龍形器」は、全長70.2cm、全身を2000点余りの各形状のトルコ石片を組み合わせられており、トルコ石片のサイズは約長さ0.5cm、幅0.4cm、厚さ0.1cmであり、正面は研磨されて光沢があり、背面には切断と打割の痕跡がある⁴⁷。そして黒色の粘着物が用いられていた。発掘担当者によると、

これらのトルコ石片は漆器或いは木質製品上に象嵌されており、一層編み物のような物に敷いている。破損が大変著しく、自然科学分析によって確認する必要がある。龍形頭部には、トルコ石を集め合わせた手の込んだ図案であり、器体はトルコ石を組み合わせる菱形紋様を組み合わせくねらせ、尾の先端は内巻きである。第3種は玉器のトルコ石象嵌である。主に牙璋、玉鉞、三日月形器などの祭祀用具となる。これら器物の象嵌孔は得意な孔が穿たれ、その後、トルコ石が嵌め込まれる(図41)。

ある研究者の研究によると、象嵌と青銅器に粘着させる製作方法は、先に銅片を鑄造し、銅片上に溝状の窪みを施したのちに象嵌を行う。つまり、はじめに青銅器上に鑄造段階で陰刻の紋様を施し、紋様の規格に沿って各種形状に合ったトルコ石を割り付けていく。そして、膠や漆や桐油またはアスファルトといった粘着剤を用い、器表面の陰刻紋様上に貼りつけていく。器表面にトルコ石を嵌め込んだのち、砥石を用いて磨いて平滑にする。二里頭文化期では、象嵌に用いられるトルコ石はすべて磨かれ小さく薄くなっており、およそ0.5cmほどである。この種の加工は高い玉石加工技術が必要となる。そのため、トルコ石象嵌青銅牌飾の出現は、青銅と象嵌が他の青銅や玉器製作技術の中から独立して出てきたものであり、ひとつの独立した工芸技術となった。つまり、青銅象嵌複合技術は、後期青銅時代に流行する複合金銀象嵌工芸の先駆けなのである⁴⁸。

トルコ石片が如何にして隅丸長方形の青銅牌飾の上に象嵌されるのか、再びみることにしよう。トルコ石を象嵌した青銅牌飾と以前に出現した牌飾とは共通点がある。すなわち、形状はおおよそ隅丸長方形、上縁は下縁よりもやや広く、左右にはそれぞれ二つの鈕があり、紋様のある面は凸面で象嵌されたトルコ石で満たされ、神秘的な獣面を構成している。背面には麻布の痕跡があり、服飾に利用したと考える研究者もいれば、シルクに包まれていたとの考えも

⁴⁶ 鄧聡・許宏・杜金鵬「二里頭文化玉工芸相関問題試釈」『科技考古』第二輯、科学出版社、2007年。王青「鑲嵌銅牌飾的初步研究」『文物』2004年第5期。王青「鑲嵌銅牌飾所見中国早期文明進程問題」『東方考古』第1集、科学出版社 2004年。王青「紐約新見兩件鑲嵌銅牌飾弁偽」『中国文物報』2007年2月16日。量博満「浅談二里頭文化的銅牌飾」『二里頭遺址与二里頭文化研究』科学出版社 2006年。王金秋「二里頭遺址出土的銅牌飾」『中原文物』2001年第3期。

⁴⁷ 鄧聡主編『華夏第一龍展覽図録』、香港中文大学、2012年。

⁴⁸ 高古玉「古玉居説玉：夏商時期的玉石製作技術」、www.jades.cn、2011年11月。



図41 二里头遺跡 (A)、三星堆遺跡 (B)、天水博物館 (C) 出土のトルコ石象嵌牌飾の比較

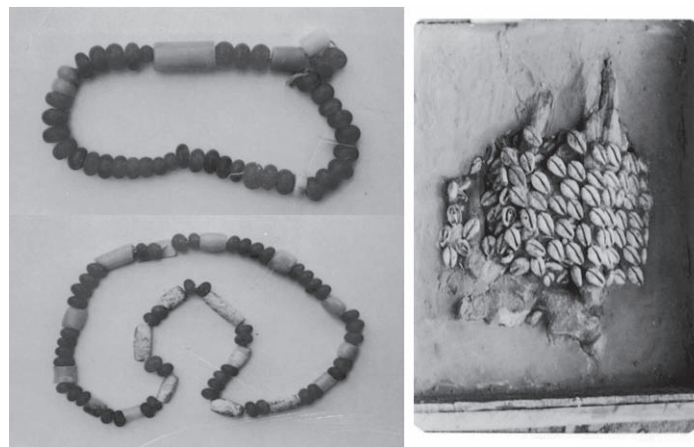


図42 大甸子墓地出土の瑪瑙ネックレスと海貝
(中国社会科学院考古研究所編1996より引用)

ある。但し、青銅牌飾を観察する機会があった研究者は、トルコ石牌飾にほぼ同様の麻布或いは絹織物の痕跡が確認されており、脱落した小破片のトルコ石にも微かに絹織物の痕跡が見られる。このことから、古代の人々は、まず鑄あがった青銅牌の上に麻布或いは絹織物を敷き、その後、細かなトルコ石片を貼り合わせる。そして、牌飾上の獣面紋飾もまた先に設計し、トルコ石片を特定の図案に並べて貼り付ける。これまで出土した、或いは海外収蔵品トルコ石象嵌青銅牌飾をみると、あるものは両眼が丸く見張り、また両眼が杼形なものもある。また、両眼が円形で環は複数めぐり、中は凸珠が嵌め込まれ、冠部もすべてが同じではない⁴⁹。

5. 大甸子墓地出土のトルコ石象嵌

二里头遺跡出土のこうしたトルコ石装飾品を除き、二里头文化とおよそ同時代の墓地遺跡からは、トルコ石象嵌牌飾は出土していないものの、おおくのトルコ石象嵌漆器、土器とトルコ石装飾品が出土している。それが内蒙古自治区に位置する大甸子遺跡である⁵⁰。大甸子遺跡は夏家店下層文化の墓地であり、墓地からは大型墓葬143基、中型墓葬434基、小型墓葬52基が発見されている。そこから出土したトルコ石の総点数は332枚で、85基の墓からとなる。これらトルコ石は2つの型式に分けられる。ひとつ目は偏四角形で計211枚、長辺に孔がある。もうひとつは管状で計121点、円柱形の珠である。トルコ石が副葬された墓葬中、半分は男性、4

⁴⁹ 鄧聡・許宏・杜金鵬「二里头文化玉工芸相關問題試釈」『科技考古』第二輯、科学出版社、2007年。

⁵⁰ 中国社会科学院考古研究所編著『大甸子』、科学出版社、1996年。

分の1は女性で、4分の1は子供であった。トルコ石が出土すると同時に213枚の瑪瑙珠も17基の墓葬から出土している。報告者の研究によると、トルコ石を帯びる耳飾りの男性は、女性よりも多くにあり、女性と子供は瑪瑙珠を掛けている。装飾品は大理石、トルコ石、赤瑪瑙と海貝が主であり、明らかに白、緑、赤が装飾品の主調となっており、大甸子墓地において装飾品の色彩に対する組み合わせが重視されていたことを表している（図42）。

このほか、大甸子墓地は更に38基の墓葬から土器、漆器、紡織品或いは棺桶上の二枚貝や巻貝のほか、トルコ石の象嵌器類が発見されている。その中のM885、M905とM818では、陶鬲の口縁上に溝が施され、溝には円形の貝殻片が粘着剤で固定され嵌め込まれていた。38基の墓葬中では漆木、編み物、塗料が発見され、ならびに象嵌物の墓葬中13基でトルコ石が発見されている。その中のM726では鬻と爵に漆膜でトルコ石片を貼り付けており、M905、M931では漆質の觚にトルコ石を貼り付けている。更に漆膜上に編み物を敷き、トルコ石片を貼り付けるものもある。M726の人骨頭部に25枚のトルコ石が発見されており、おそらく耳飾りと頸部の装飾であろう。M627はトルコ石珠1点が発見されたのを除き、513片もの方形のトルコ石象嵌片が見つかった。ある面は光沢があるものの、別の面は粗雑である。報告者はおそらく象嵌された腕輪であると考えている。M677の頭部から22枚のトルコ石が発見されている。M905の被葬者の額に2点のトルコ石珠があった。M6122のトルコ石珠は耳のあたりにあり、耳飾りであろう。そして、副葬された土器内には、トルコ石片5枚と海貝5枚が見つかった。大甸子墓地で発見された爵、鬻と觚などの土器は、すべて二里頭文化特有の器種で、象嵌装飾が流行した特徴をもつ。また、このふたつの文化間の共通点、やや距離が離れた2遺跡間のこの種の共通性の背景は我々の注意を引くに値するものである。

第四章 古代中国におけるトルコ石装飾品と象嵌の種類

1. トルコ石装飾品の種類

考古資料から明らかなのは、装飾品に使われるトルコ石の種類は多く、小型の製品が主体だということである。新石器時代は耳飾りや垂飾が主であり、統計によると、およそトルコ石が占める割合は総装飾品の80%となる。特に前期の裴李岡文化期は95%以上が耳飾りや垂飾となる。新石器時代中期になると、中原地区の下王崗遺跡、漢水流域の龍崗寺遺跡、西北地区の馬家窯文化と齐家文化において珠類と管状類のトルコ石装飾品が見られる。明らかなのは、トルコ石が耳飾りや垂飾を除き、頸部に掛けるネックレスを作り始め、珠管類の製作技術もまた前期よりも複雑となる。特に形状と穿孔技術の要求度は高く、トルコ石の製作技術の進歩は明らかである。新石器時代後期になると、黄河上流域の馬家窯文化と齐家文化、中流域の陶寺文化、下流域の大汶口文化ではトルコ石象嵌が均しく発見されるようになる。このことは大きな変化であり、技術的にまずモザイク式の装飾形式がはじまり、更に重要なのはトルコ石が異なる素材と組み合わせたり、粘着剤が使用されていることで、この現象は大変重要な変革と位置づけられる。また、トルコ石は普遍的に作られる垂飾品を除き、常に見られる利用方法は象嵌片となる。

2. トルコ石象嵌片の分類と象嵌技術の類型

中国新石器時代後期のトルコ石象嵌片は、各地区の考古学文化によって異なり、その象嵌片と象嵌の方法はすべて同一というわけではな

い。単純に分類すると、単片を象嵌するもの、多量の不定形な象嵌片を象嵌するものと切断、成形した象嵌片を象嵌するものとなる。象嵌に利用される主な素材は、常に見られるものとして、骨片、骨珠、土器、玉石器、漆木器と青銅器などであり、相応のまわりにある補助材料である粘着剤、紡織品や編み物或いは動物の皮となる。そして、まわりにある技術を補助的に利用し、時代や文化に依って、各種象嵌装飾方式は多少の違いがある。例えば、象嵌片の玉石穿孔、陰刻、象嵌骨片など長い部材の切取りと接着面の研磨、青銅器象嵌用の枠組みといった特殊な鑄造などである。これらの技術は考古学的な発見によるトルコ石象嵌遺物、例えば青銅質、骨質、玉石質の残留部分を観察することでわかる。漆木質は腐朽しやすいので原形がわからないが、僅かな痕跡は見ることができ。次によく見られるトルコ石象嵌の象嵌方式について具体的な分析を試みる（図43）。

(1) 単片を象嵌するもの

この種の象嵌は粘着剤を使用しないこともある。トルコ石片は器体に嵌め込む大きさに合わせたサイズに成形される。こうした象嵌方式は黄河下流域の新石器時代後期には比較的普遍的であり、有名なのは例えば山東省大汶口文化の遺跡から出土した丸いトルコ石を嵌めた骨製筒形器、同省臨朐県の龍山文化朱封遺跡出土のトルコ石を嵌め込んだ図案の透かし玉飾、陝西省北部の石峁遺跡と山西省南部の清凉寺遺跡から出土した玉璧、二里头文化の遺跡から出土した

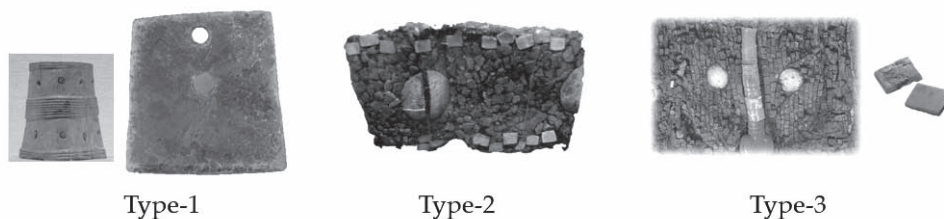


図43 トルコ石象嵌片の類型

トルコ石象嵌の玉刀、玉璋、三日月形器がある。具体的な方法は、まずトルコ石を必要な形状に成形し、予定されている位置に丸い穴や窪みを施し嵌め込む。大汶口文化の骨製筒と象牙製筒には4～5か所の孔が見られる。玉器にはふたつの左右対称な丸いトルコ石が嵌め込まれ、神の両眼を象徴しているようである。清凉寺の場合には玉壁の一行に並んで象嵌している。

(2) 多量の不定形な象嵌片を象嵌するもの

この種の象嵌方式は、寧夏回族自治区固原市店河遺跡出土の土器に見られるトルコ石象嵌のように、齐家文化の土器象嵌だけでなく、黄河中流域の陶寺文化の遺跡から出土する骨製簪や腕輪にもトルコ石象嵌が確認される。陶寺遺跡の墓地からは900点余りのトルコ石片が出土しており、大部分が骨製簪の尾部或いは腕輪の象嵌片である。象嵌の主体となる部分は腐朽してわからないが、穿孔のない象嵌片が散乱しており、それらは不規則な形状であった。同様に陶寺文化に属する下靳墓地もまた、多くの象嵌製の腕輪が出土しており、その象嵌方法は陶寺遺跡と同様である。また、不定形な象嵌片が黒色の膠性の物質で貼り付けて成形されており、この種の粘着剤が象嵌方式の鍵となる素材である。

(3) 切断、成形した象嵌片を象嵌するもの

この象嵌は二里頭遺跡出土の象嵌青銅牌飾と龍形器が代表的である。切断面は整えられ、サイズも均一でおよそ0.5cmとなる。それぞれの象嵌片は図案に合わせて繋ぎ嵌め込まれ、整然と規則的に配列されている。また二里頭文化第3期出土の5点の円形青銅牌飾のトルコ石は、逆向きに均等に配列されている。このほか、青海省同徳県宗日遺跡の馬家窯文化の石棺墓からは、トルコ石が貼りつけられた腕輪が1点出土している。骨で作られた筒形の腕輪で、その表面にトルコ石が貼り付けられており、象嵌片は均等に成形されている。同じく宗日遺跡の墓葬内では、一枚岩にトルコ石が象嵌され、象嵌片の縁辺は切り揃えられている。このほか、馬家窯文化に特有の縁辺が切り揃えられた骨製の象

嵌片もまたこの類型に属す。

3. 象嵌工芸の分析と象嵌の分類

二里頭文化のトルコ石象嵌工芸は、並外れた美しさがある。トルコ石装飾品もまた二里頭文化で発見された数量が最も多い素材のひとつである。トルコ石象嵌工芸は二里頭文化で始まったものではないものの、象嵌工芸に言及すれば、明らかにトルコ石と関連があるであろう。すでに上述しているように、実際にはトルコ石象嵌が発見されると同時に、その他の素材を用いた象嵌も見つかっている。例えば、甘肅省永昌県鴛鴦池墓地では、骨製簪の尾部に黒色物質で白色の骨や石を貼り付け、黒と白のコントラストが非常に美しく、目を引くようになっている。寧夏回族自治区固原市店河遺跡と四壩文化の遺跡で発見されたトルコ石象嵌の土器をみると、これらの象嵌はすべて粘着剤で貼り付けることが必須条件となる。このことから、我々は、トルコ石装飾品を分析するだけでなく、この象嵌技術、象嵌に用いる複合素材や粘着剤についても議論する必要があるだろう。考古資料では、象嵌技術は新石器時代中後期に出現し二里頭文化期に発展するなかで、単純なものから複雑な技術進化を遂げているのである。象嵌の主体と客体の素材と象嵌方法もまた多くの変化があり、総じて言えば、象嵌技術はおよそ以下の7種に分類される(図44)。

- 单体绿松石饰件(Single piece of turquoise ornaments)
- 骨质与黑色胶状物镶嵌(Bone inlay with black Jelly)
- 陶器镶嵌(Ceramic inlay with turquoise)
- 玉石器镶嵌(Jade inlay with turquoise)
- 木质漆器镶嵌(Wood or lacquer inlay with textile and turquoise)
- 铜质镶嵌(Bronze inlay with turquoise or textile and turquoise)

図44 象嵌体類型と象嵌技術

第1種：骨器の表面に黒色の粘着物を塗り、その後、骨環、骨片、貝殻或いはトルコ石を象嵌する。黒色膠状物質は粘着物と象嵌主体としても機能する。この種の象嵌は主に黄河上流域の馬家窯文化と齐家文化、中流域の陶寺文化で分布する。鴛鴦池墓地で発見された多数の黒色

粘着物に骨片を象嵌した骨製腕輪が被葬者の手から腕にかけての位置から発見された。また、骨製簪の尾部に黒色膠状物で成形された錐体に白色の小型骨環が象嵌された装飾が施されている。甘肅省広河県地巴坪半山類型墓地で発見された12点の骨製腕輪もまたこの種類に属する。同時に柳湾墓地からも多くの骨片象嵌の腕輪が発見されている。陶寺文化の陶寺遺跡では、10組の骨製簪の尾部に黒色膠状物にトルコ石が象嵌され、簪と玉環が組み合わせて接合されている。

第2種：黒色膠状物質に直接トルコ石を象嵌する。この手法もまた齊家文化と陶寺文化によく見られる。寧夏回族自治区菜園遺跡で発見された丸餅形黒色膠状物上に8つのトルコ石片が象嵌されていた。陶寺遺跡でも黒色膠状環飾り上にトルコ石と二枚貝が象嵌された緑と白のコントラストのある腕輪が見ついている。おなじく陶寺文化の下靳墓地でも同様の象嵌方式の腕輪が3点発見されている。黒色膠状の物質については、動物の皮質或いは天然化合物と考えられており、自然科学分析による解明が待たれる。この類型は、この種の黒色膠状物質が象嵌の主体となる。

第3種：土器に直接トルコ石を貼り付ける。または土器に溝を施し、トルコ石、二枚貝片をその溝に嵌め込む。齊家文化の店河遺跡で発見されたトルコ石象嵌の土器が、最も早い土器象嵌であろう。その後、四壩文化の遺跡でも土器象嵌が発見され大甸子墓地では、更に土器口縁に溝を刻み二枚貝片を嵌め込む手法や、鬻、爵や觚に漆膜を用いてトルコ石や巻貝を象嵌する手法も見られる。

第4種：骨器と象牙器にトルコ石を象嵌するが、粘着剤は使用せず、穿孔方式で直接象嵌する。主に山東省の大汶口文化圏に分布する。象牙製筒と骨製筒のトルコ石象嵌が例として挙げられ、このほか、穿孔と紐で骨片を繋ぎ合わせた骨片象嵌技法もある。山東省王因墓地で3点骨製腕輪が発見されており、それぞれの腕輪は数点の骨片を繋ぎ合わせており、例えばM168：7の骨製腕輪は3つの長さが均等な骨を組み合わせており、それぞれの骨片にはふたつ

の孔が穿たれ紐で繋ぎ合わせている。黄河上流域で用いられる粘着剤による接合とは異なる。

第5種：玉石器にトルコ石を象嵌する。中国伝統の玉石製作工芸及び玉石製作の基本工程は切断、研磨、穿孔、彫刻であり、具体的なそれぞれの工程ポイントやその特徴的な工芸技術として、ここでは象嵌と関係があるのは、最終段階の彫刻であろう。彫刻は陽刻と陰刻の2種類があり、主体となる素材に異物を象嵌するには、溝を刻む陰刻を施す。陰刻は、線型の違いを重視して立体感や躍動感を作り出す。技術的にまさに象嵌工芸が追及する効果であり、トルコ石象嵌による基礎のひとつとして捉えることができる。山東省の龍山文化では、玉石透かし彫りの王冠に象嵌されたふたつのトルコ石が見られる。二里頭遺跡では数点の玉鉞と玉璋にトルコ石が象嵌されていた。後期青銅器時代には、多くの玉石製の兵器と青銅兵器が出現しており、象嵌技術が用いられている。トルコ石を象嵌した銅戈は比較的典型的なものである。これら兵器は殷代に出土しており、夏代の後象嵌技術の伝承と革新があったことを明示している。

第6種：漆器或いは木器にトルコ石と巻貝、二枚貝片などを象嵌する。大甸子墓地では多数発見されているが、多くは腐朽し詳細な情報はわからない。そのほか、浙江省良渚遺跡群卞家山遺跡では漆器に非常に綺麗な装飾図案で玉珠が象嵌されていた。上海・江蘇省一帯の良渚—大汶口文化の花庁遺跡でもトルコ石質の象嵌片が見ついている。象嵌される主体は発見されていないものの、腐朽し残りにくい漆木器類であろうと推察される。やや時代が下った好川墓地でも、漆器の觚に玉片が象嵌されたものが発見されている⁵¹。

第7種：青銅器にトルコ石や二枚貝片などを象嵌するもの。二里頭文化段階から玉石象嵌だけでなく青銅牌飾にトルコ石の象嵌をする工芸技術も始まっている。このことは飛躍的な技術革新であろう。つまり、鑄造成型された青銅器にトルコ石を象嵌することは、ふたつの全く異

⁵¹ 浙江省文物考古研究所・遂昌市文物管理委員会編著『好川墓地』、文物出版社、2001年。

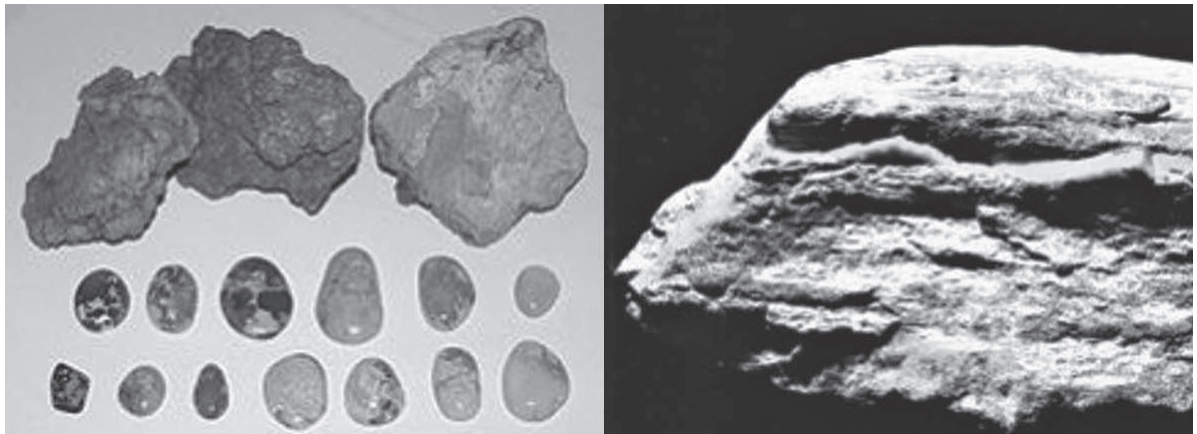


図45 トルコ石鉱石標本 (URL: turquoise4_wiki.jp2009より引用)

なる技術を組み合わせる必要がある。この時期の象嵌技術は頂点に達しており、後期青銅器時代まで盛行した。

以上の分析で明らかになったことは、新石器時代前中期においてトルコ石が多く出土する遺跡は主に黄河上流域と漢水流域に集中する。例えば、黄河上流域では、馬家窯文化の青海省柳湾墓地、甘肅省臨夏回族自治区の林家遺跡や同省広河県地巴坪遺跡などとなる。中原および長江支流の漢水流域では、賈湖遺跡、下王崗遺跡や龍崗寺遺跡が挙げられる。東北地区では、紅山文化の遺跡で4例発見されている。黄河下流域の山東省大汶口文化では、王因墓地、野店墓地や大汶口墓地などで発見されている。発見されている地域は比較的広範囲であるが、他の玉器のように普遍的ではない。製作技術で大きな変革があったとはいえ、この種の分布形式は、新石器時代から二里頭文化期になろうとも大きな変化は見られない。こうした状況はおそらくトルコ石の産地或いは原材料の入手経路と関係がある。つまり、トルコ石の鉱源は玉器のように豊富ではなく、鉱石となった多くが副産物としての小さな石塊であり、捨てられやすく、河川で遠方まで流されやすい。もしも河川に沿って鉱山があるならば、下流域では少量のトルコ石原料が、特別に運ばれることなく採取できる環境にあったであろう (図45)。

日本の新潟県一帯は、大きな翡翠原石の産地であり、河川流域では、バラバラになった翡翠原石を見つけることができる。この事例は、我々

にヒントを与えてくれるものである。賈湖遺跡から出土したトルコ石は、原産地の自然科学分析を実施し、その結果は、近隣の湖北省鄖県一帯のトルコ石産地ではなく、また現地の原石かどうか不明であった。これらの多くは、おそらく複数の経路が考えられる。新石器時代後期に象嵌技術が出現し、トルコ石の需要が増加するにつれ、専門の製作工房が必要となると、トルコ石装飾品の製作とその利用が為政者の視野に入り始め、権力者や貴族たちの身分的象徴となっていく。トルコ石もまた、装飾品だけでなく、初期王朝国家における多くの祭祀儀礼に組み込まれる。トルコ石のこうした社会的役割の変化は、トルコ石そのものの価値だけではなく、魅力の増した象嵌技術によって主に決定されたのであろう。このため、象嵌技術が出現する意義を追求することは、初期王朝国家の成立と形成過程を理解するうえで深遠なる意義がある。

第五章 トルコ石と象嵌用粘着剤の産地分析と地域間交流

1. トルコ石の産地

いまのところ知られている中国におけるトルコ石の鉱山は、湖北省西北地区、陝西省白河県月兒潭鉱山（湖北省西北地区近く）、河南省浙川県、安徽省馬鞍山市、雲南省昆明市と安寧市、青海省と新疆ウイグル自治区哈密市戈壁灘黒山嶺などの地がある。

湖北省西北部のトルコ石鉱山には鄖県、鄖西県と竹山県などと共に計40か所を超え、北部、中部と南部の大きく三つの鉱山地帯に区分される。トルコ石は緑色、淡い青色を呈し、5億年前のカンブリア紀前期の炭質と珪素でできた岩石の隙間をレンズ状や脈状で満たしている。

陝西省白河県月兒潭のトルコ石は、産出状況が湖北省西北地区と基本的に同じであり、同一の鉱山帯に属している。但し、鉱石のある層の年代は4億年前のシルル紀の炭素石英絹雲母片岩及び絹雲母石英片岩を含んでいる。当該地区には岩洞子、白龍洞や穆桂寨という三つの主要な鉱山とともに計20か所を超える鉱点がある。採掘がはじまった年代は古く、産出量は大変少ない。但し、近年秦嶺山脈北麓の商洛県の洛南で新たにトルコ石の鉱石源が発見された。少なくとも殷周時代にはすでに採掘がはじまっており、いまのところ、この新発見については公開された発表はないが、二里頭文化期におけるトルコ石の流行背景を研究するうえで重要な手がかりとなる。

河南省浙川県および安徽省馬鞍山市のトルコ石鉱山は規模が小さく、採掘開始年代は不明である。新疆ウイグル自治区哈密市戈壁灘黒山嶺のトルコ石は、1970年代から80年代に発見された。鉱化帯は東西2.5km、幅は5～40mに分布する。全鉱化帯の上には古い採掘坑が10か所余りある。その中には深さが10mほどにもなる採掘坑があり、山の上には古代にトルコ石を採掘していた丸屋根の小屋が発見されている。そして、山の南斜面には、古代の採掘者の住居址と灰色の土器片と打製石器などが見つかった。最も早い採掘は新石器時代であろうと考え

る研究者もいる。当該鉱山区は甘粛省に近く、地質は河西或いは河西回廊に属する。雲南省昆明市および安寧市の境には、淡い青色のトルコ石が赤鉄鉱の裂けた隙間から産出されている。色は濃いものの変小な塊であり、古くは何時から採掘が始まったかは不明である。このほか、四川省と西藏自治区でも、トルコ石の鉱石が埋蔵されていることが確認されている⁵²。

当然、我々は出土したトルコ石装飾品と周辺の産地とに関係性があるかどうかは、簡単には考えることは出来ず、産地同定の自然科学分析をする必要がある。いまのところ、賈湖遺跡や王城崗遺跡といったいくつかの遺跡では、すでに産地分析が実施されている。中国科学技術大学の馮敏氏らが顕微鏡、X線回析、蛍光X線分析などの測定手段を用いて賈湖遺跡出土トルコ石及び陝西省安康市、湖北省鄖県と安徽省馬鞍山市で産出される現代のトルコ石について、岩性、物性と微量成分の分析を実施し、賈湖遺跡のトルコ石は上記のトルコ石産地のものとは原産地が異なると考えている⁵³。同時にまた、王城崗遺跡と二里頭遺跡出土のトルコ石の分析も行い、その結果はこれらのトルコ石がそれぞれ異なる地質環境に由来し、異なる時期と異なる地点が交錯していることから、具体的な産地情報については、更なる研究が必要となる⁵⁴。これら遺跡付近にトルコ石鉱床があるとはいえ、考古学的に出土したトルコ石装飾品の多くが、小型隅丸の円形、梯子形、方形と長方形の垂飾と耳飾りとなる。横田禎昭氏の見解によると、これらトルコ石はおそらく表面の母岩が脱落した石塊であり、河流や落石によるものを採

⁵² 樂秉璈編著「中国古代鉱石産地 第19章 緑松石」『中国宝石和玉石』、新疆人民出版社、1989年。

⁵³ 馮敏・毛振偉・潘偉斌・張仕定「賈湖遺址緑松石産地初探」『文物保護与考古科学』第15卷第3期、2003年。毛振偉・馮敏・張仕定・張居中・王昌燧「賈湖遺址出土緑松石の無損検測及鉱物来源初探」『華夏考古』2005年第1期。

⁵⁴ 董俊卿ほか「河南境内出土早期玉器初步研究」『華夏考古』2011年第3期。

集、加工、研磨して装飾品となった。このことは、トルコ石が原産地の特定が大変難しく、おそらく複数の原産地から来たものであり、すべてが二次的な原産地で採集されたものだからである。これらトルコ石が出土した遺跡と原産地までの距離は、おおよそ200kmほどである。こうした状況において、トルコ石の原石を採集して製作し、消費するには、さまざまな集団が存在し、彼らの間に交易関係が存在していたであろう⁵⁵。

新石器時代後期から二里頭文化期では、トルコ石は垂飾と耳飾りなどの装飾品を除くと大多数が象嵌を施されたものとなる。西北地区では多くが瑪瑙珠と海貝などが一緒に出土する。特に海貝は馬家窯文化馬廠類型の柳湾墓地で見ついている。山東地区では更に早い段階の大汶口文化期に象牙製品など共に出土することが多い。トルコ石装飾品は製作技術で大きな変革があっただけでなく、装飾形態と共存する遺物にも変化がみられる。その代表である製作技術がまさしく象嵌の流行であろう。いまのところ分かっているのは、象嵌で最も早い出現例は、馬家窯文化半山類型の象嵌腕輪であり、同じ長さの骨片を黒色膠状物質に象嵌している。その後、この種のものが齐家文化の骨製簪、陶寺文化のトルコ石象嵌腕輪や骨製簪の尾部に付けられたトルコ石象嵌が発見されている。但し、この種の表面をみると、ほとんど同じような黒色膠状物質は同一種の物質であるとは限らず、更に自然科学分析による成分分析によって明らかにする必要があるが、少なくとも新石器時代後期に、このような黒色膠状物質を用いたトルコ石象嵌が流行したことは言えるであろう。その使用範囲を見ると、おおよそ黄河上流域から中流域の両岸に沿っている。山東省のトルコ石象嵌製品には、これまで黒色膠状物質に関する報告はなく、骨片に穿孔し紐で繋ぎ合わせた骨製腕輪であり、それと共存する遺物も西北地区とは異なる。大汶口文化から多くの象牙類が出土しはじめるが、この種の象牙は黄河上中流域の齐家文

化や陶寺文化には、まだ出現していなかった。

二里頭文化期では、トルコ石象嵌が流行の最高潮に達し、その製作技術もまた以前よりも格段に進歩した。象嵌の主体は青銅器や漆器が主となり、トルコ石装飾品の数量もまた以前と比べると非常に増加する。象嵌技術ではトルコ石を象嵌する際に粘着剤を使用しているのか、またはちょうどよい大きさの青銅器に直接トルコ石を嵌め込んでいるのか、或いは両者の手法が共にあるのであろうか。報告によれば、二里頭遺跡の青銅器象嵌には紡織品の痕跡があり、これは象嵌の際に粘着剤を用いるだけでなく、更に別の物も用いている。これら具体的な状況は、すべて出土遺物の観察によって答えを出し得るものであり、自然科学分析を行う必要がある。大甸子墓地で出土した象嵌製品は、土器に漆膜を用いてトルコ石を象嵌し、こうした漆膜もおそらく一種の接着剤である。ここでも同じように紡織品或いは編み物の痕跡が確認されている。そのため、トルコ石の原産地分析に注目すると同時に、象嵌に用いる接着剤、関連物質の分析と産地の確定に関心を持つ必要がある。

2. 象嵌用接着剤の分析

(1) 古代ヨーロッパにおけるアスファルトの使用例

古代の天然アスファルトは、旧石器時代に複合的な道具が出現するにつれて使用されてきた。一般的に複合的な道具には象嵌あるいは縄で縛るなどの方法がある。しかし、フランスの考古学は、シリアにて表面に黒色の物質が付着した石製品を発見した。このような石製品は多くの遺跡で発見されており、研究者たちの注目を集めている。その成分については、ガスクロマトグラフィー質量分析法（GCMS）にて分析され、この黒色物質は風化が著しいアスファルトであることが分かった。Umm el Tel遺跡は、旧石器時代からローマ時代に跨る複合遺跡である。旧石器時代の文化層は87に分層され、第53層は旧石器時代中期に属し、アスファルトを帯びた石器が発見された。但し研究によると遺跡周囲40km²圏内には天然アスファルトの産地は発見されない。このことは、これらアスファル

⁵⁵ 横田禎昭『中国古代的東西文化交流』、雄山閣 1984年。

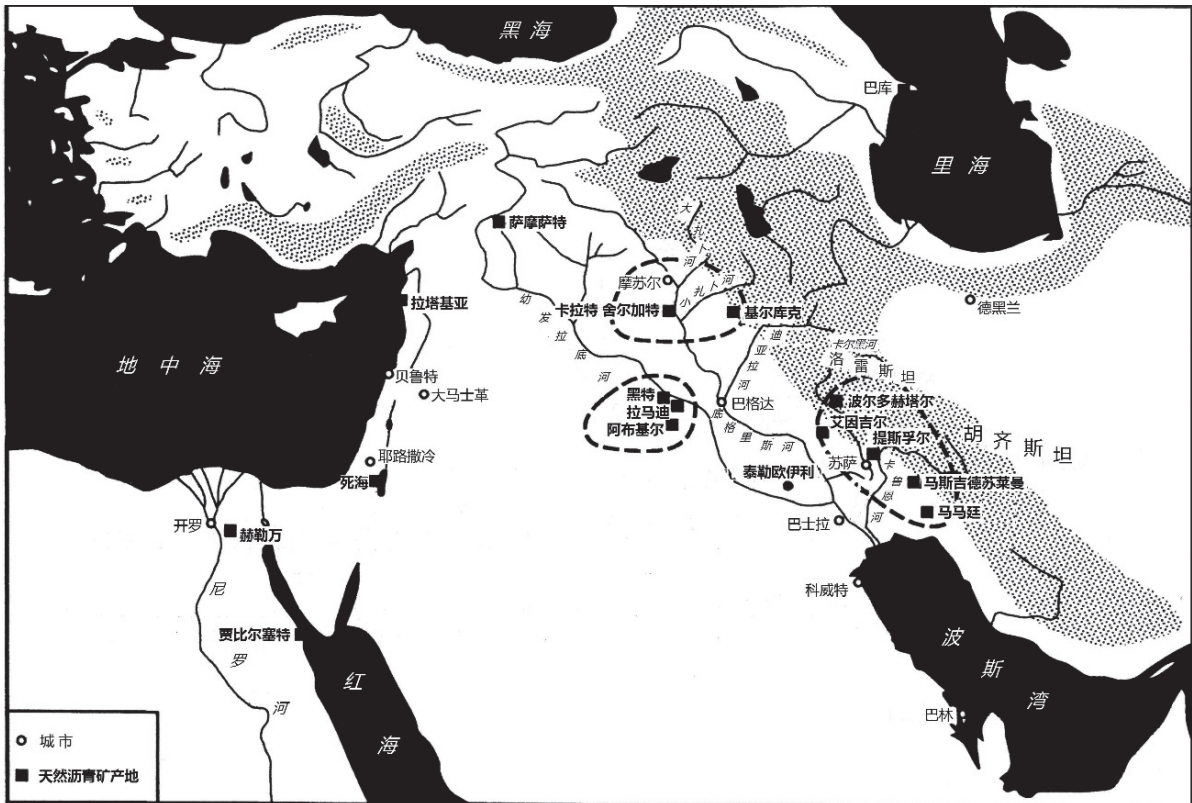


図46 中東地域における天然アスファルトの分布（周振宇2008より引用）

トはおそらく持ち運ばれたものと考えられる。およそBC600年の新バビロニア王国期になるまで、ティグリス・ユーフラテス両河川流域の防水素材、顔料や粘着剤などに、アスファルトが用いられている。またアスファルトは作画にも用いられている。アスファルトに貝殻を象嵌し人や動物を描くもので、例えばシュメールのリラ（竖琴）に裝飾されている牛頭には、アスファルトが使用されている⁵⁶。これら古代で利用されたアスファルトの事例から、トルコ石象嵌で用いられている黒色膠状物質分析において参考となる。樹脂もまた古くから常に用いられてきた粘着剤のひとつであり、漆樹脂は接着に用いることができ、つまり、トルコ石象嵌に使用される黒色物質は何であるか、自然科学分析によって結論を出す必要がある。象嵌工芸はヨーロッパの新石器時代遺跡においても発見されており、少なくともフランスでは、BC3000年の遺跡から珊瑚などを象嵌した容器の例があ

⁵⁶ 周振宇「古代天然瀝青の使用」『化石』2008年第3期。

る⁵⁷。またエジプトではBC4000～3500年のナカダ（Naqada）文化では、骨製の人物像の眼に玉石或いは貝類を象嵌する表現手法が見られる⁵⁸（図46）。

(2) 縄文時代における天然アスファルトの使用例

北海道函館市では、縄文時代中期の遺跡から塊状の天然アスファルトとその工房が発見されており、周辺の同時代或いはそれよりも古い段階の縄文時代遺跡より、天然アスファルトで接合した石器と補修された土器が発見されている。これまでのところ、北海道だけでなく、東北地方の秋田県や岩手県などの縄文時代遺跡からも、少なからず発見されており、群馬県の遺跡においても天然アスファルトが発見された報

⁵⁷ Lloyd and Jennifer Laing “Art of Celts” (World of Art Series), Published by arrangement with Thames and Hudson Ltd, 2008.

⁵⁸ ヤマミール・マレク著（近藤二郎訳）2004『世界の美術・エジプト美術』岩波書店。

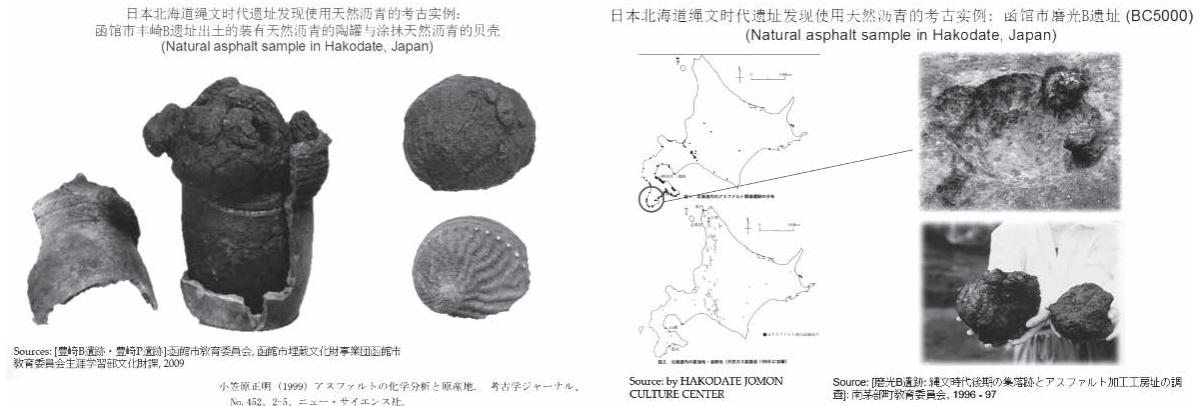


図47 豊崎B遺跡（左）と磨光B遺跡（右）出土の天然アスファルトと製作工房

告がある。ここでは、特に北海道函館市の豊崎N遺跡、豊崎B遺跡と磨光B遺跡について紹介する。豊崎N遺跡とB遺跡は、縄文時代中後期に属し、およそBC4000～3000年の集落遺跡である。ここでは特に注目される出土物としては、深鉢土器内いっばいに満たされた天然アスファルトであろう。これは当時、土器の修理や鏝を固定するための粘着剤であり、こうした粘着剤の産地は秋田県にある。そのため、当時、地域間での交易があったことが窺える。このほか、貝殻に天然アスファルトが満たされていた事例も1件ある⁵⁹。

磨光B遺跡は、縄文時代後期の焼失住居が発見された遺跡である。住居の周辺からは円形石の祭祀遺構も見つかっている。国宝の中空土偶が出土した著保内野遺跡とも隣接しており、互いに関係があったであろう。この遺跡で特に注目されるのは天然アスファルトであるが、発見されたのは製作工房から出土した、それぞれ2350gと860gにもなる天然アスファルトの塊2点のほか、天然アスファルトが塗られた土器片であり、この地で加工から利用に至る専門技術集団がいたことが窺える⁶⁰（図47）。

(3) 古代中国における樹脂と漆液の使用例

中国古代では、BC7000年の新石器時代跨湖橋遺跡で漆器が発見されており、漆液と樹脂を用いることで、粘着剤とすることが可能となる。但し、いつから樹脂と漆液を用いた粘着剤が始まったのかは、明確な結論は出ていない。少なくとも、江蘇省や浙江省の良渚文化期において、大量の漆器が出現するにつれ、漆液は象嵌用の粘着剤となり下家山遺跡では実例が出土している。その後の好川墓地でも漆器の觚に玉片を象嵌した実例が大変多く見られる。このことは、おそらく樹脂と漆液が人類で最も早く使用された粘着剤なのであろう⁶¹（図48、図49）。

3. トルコ石製作工房

近年、二里頭遺跡宮殿区の南にある官営工房区内では、二里頭文化後期に属するトルコ石製作工房が発見され、工房内にはトルコ石の廃棄坑が見つかっている。坑内からはトルコ石の細片が数千点出土しており、一部には切断して研磨した痕跡も認められる。これら廃材には、トルコ石の原料、未成品、破損品や廃材が含まれている。こうした遺物は、トルコ石製品の工芸技術を分析するには絶好の資料となる。これら資料の研究によると、おおそ原石は採掘後、打ち割り、切断と研磨から穿孔、仕上げの磨き、象嵌と接合といった一連の技術細目と工程を明

⁵⁹ 函館市教育委員会生涯学習部文化財課、函館市埋蔵文化財事業団編（函館市教育委員会函館市埋蔵文化財事業団発掘調査報告書、第7輯『豊崎B遺跡』。函館市教育委員会生涯学習部文化財課：函館市埋蔵文化財事業団、2010

⁶⁰ 函館市南茅部縄文研究センター縄文博物館・NPO埋蔵文化財研究センター。

⁶¹ 浙江省文物考古研究所・良渚遺跡群考古報告之六『下家山』上下、文物出版社、2014年。



図48 好川墓地出土の玉片象嵌の漆觚

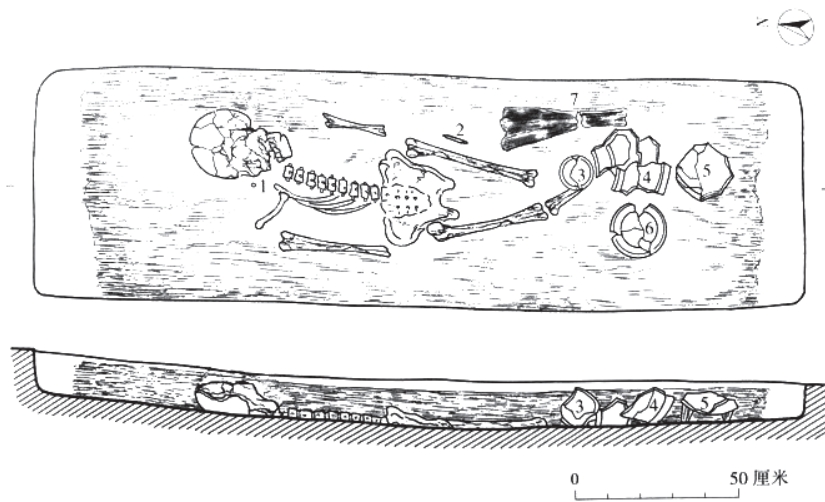


図49 好川墓地M63出土の漆觚と埋蔵位置

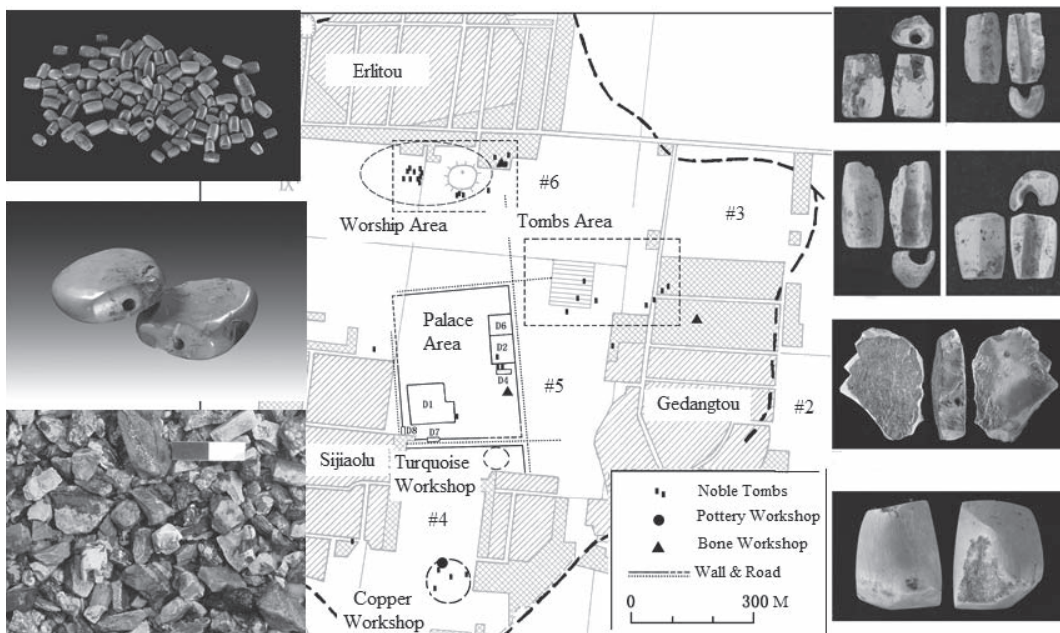


図50 二里头遺跡のトルコ石製作工房と出土資料

らかにすることができる。考古学的なボーリング調査で明らかとなったことによると、廃棄坑付近の南には、1000m²の範囲内で集中してトルコ石の原料が集中している。この推測によると、この規模はおそらく、ここがトルコ石製品の製作工房だということである。出土遺物の観察によると、この製作工房の主要な製品は、トルコ石管、珠及び象嵌品の装飾品となる。注目に値するのは、このトルコ石製品の製作工房が宮殿国隣接していること、その南の鑄造製作工房一帯及び宮城内のいくつかの区域でも、少なからずトルコ石製品、半製品、原材料や廃材などが発見されており、おそらく他の場所でもトルコ石の製作工房があった可能性が考えられる⁶² (図50)。

4. トルコ石象嵌と共存する遺物の分析

海から遠く離れた西北地区では、柳湾墓地馬家窯文化馬廠類型で15枚の海貝が発見され、同時に6枚の仿製石貝が墓葬内に副葬されていた。同遺跡の齐家文化期で発見された海貝は36枚、その中の34枚はM992、M979とM1042からそれぞれ出土している。アンダーソンが発掘した朱家寨遺跡では瑪瑙珠が多数発見されている。これら瑪瑙珠とトルコ石、白色の大理石珠を組み合わせ、緑赤白の配色をした装飾品が大変特徴がある。こうした海貝、瑪瑙珠とトルコ石を象嵌する組み合わせは馬家窯文化から齐家文化期、更に初期青銅器時代まで続き、大何庄遺跡ではトルコ石と同時に瑪瑙珠2点が出土している⁶³。青海省宗日遺跡⁶⁴、同省民和県核桃庄墓地⁶⁵、甘肅省互助土族自治県中寨遺跡、初期青銅器時代の徐家碾墓地⁶⁶と朱家寨遺跡⁶⁷と尕

馬台遺跡、酒泉幹骨崖遺跡では、みな瑪瑙珠と海貝が発見されている。

陶寺文化の遺跡ではトルコ石象嵌の腕輪にも貝の装飾が見られるほか、海貝が2点発見されている。初期青銅器時代二里頭文化期に入ると、二里頭遺跡第3期で瑪瑙珠と海貝が発見されるだけでなく、遠く離れた北方の大甸子墓地でも213点の瑪瑙珠と海貝が見つまっている。

トルコ石、瑪瑙と海貝が出土する状況を見ると、重要な遺跡内からこの三種がよく出土しており、このことは、おそらく原材料の入手と関係があり、これら遺跡の存在が遠距離交易を可能にしたのであろう。遠距離交易品を手にすることが出来た者のみが利用可能となる。象嵌用トルコ石のこうした共存関係もまた、原材料の産地を提示しているのかもしれない。

おわりに

トルコ石装飾品は中国での出現が最も早く、およそBC7000年の裴李岡文化期には、すでに装飾に用いられ、この時期のトルコ石装飾品は、その他の玉器と比べ、小型の単体の耳飾りや垂飾だけであった。このことはおそらく、トルコ石が一種の二次的な鉱物であり、大型で重厚なトルコ石が希少であったことと関係があろう。しかし、こうした原石が適する地域間へ遠距離輸送されたことは、必ずしも原石の産地だけに限ったことではない。つまり、トルコ石装飾品が出土した遺跡は大変多く、いまのところ100か所余りに達している。しかし、大多数の遺跡では1～2点であり、特別な遺跡内での出土点数がやや多いだけであり、多量のトルコ石を集中的に使用する遺跡と数点のトルコ石だけに留まる遺跡という様相を呈する。明らかなのは、地域の需要と供給を超えた直接的な関係があるということである。但し、トルコ石は軟玉のように上位階層が求めるような財産或いは権利の象徴とはならなかった。当然、もしトルコ石がこのような形式で継承されていたならば、注目を集めることはなかったであろう。しかしながら、新石器時代後期になると状況は変化し、トルコ石装飾品は他の伝統的な玉器と比べて明らかに日常的なものではなくなる。

⁶² 中国社会科学院考古研究所編著『二里頭—1999～2006』第一冊～第五冊、文物出版社、2014年、北京。

⁶³ 甘肅省文物考古研究所「武威大何庄遺址発掘簡報」『考古学報』1975年第2期。

⁶⁴ 陳洪海・格桑木編著『宗日遺址文物精品与論述選集』、四川科技出版社、1999年。

⁶⁵ 青海省文物考古研究所・西北大学文博学院2004『民和核桃庄遺址』、科学出版社、2004年。

⁶⁶ 中国社会科学院考古研究所『徐家碾寺洼文化墓地』、科学出版社、2006年。

⁶⁷ (瑞典)安特生著(劉光文訳)『西寧朱家寨』、青海人民出版社、1991年。

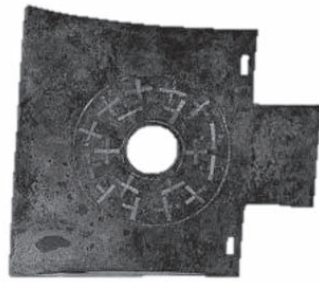
この変化は、トルコ石工芸技術の革新的な変化、つまり、象嵌技術という審美的な非伝統的な表現である。いったい、どのような原因で新石器時代後期の人々がこのような全く新たな象嵌技術によって彼らの美的感覚を表現しようとしたのかは、まったく分からないが、考古資料が我々に提示しているのは、トルコ石象嵌が流行する以前に、人々は象嵌技術が出現するための努力をしていたということである。こうした努力は、すでに技術的な試みや、各種異なる素材の組み合わせの探索に表れている。今のところ知られている西北地区の馬家窯文化が中国で発見された象嵌技術が最も早い遺跡である。その時期の象嵌は骨製の装飾品への象嵌が主であり、同じ長さの骨板を黒色膠状物質の上に象嵌している。現時点で問題なのは、この種の物質がいったい何であるのか知る必要があるということである。この種の物質は象嵌が出現したきっかけとなった素材である。なぜならば、この後のトルコ石象嵌の中でも同様の黒色膠状粘着剤が発見されている。

同時期に黄河中流域の陶寺文化の遺跡で出現している骨製簪のトルコ石象嵌は技術面で黄河上流域と大きな差異はない。但し、山東地区は例外で、象嵌技術は装飾品に用いられているものの、黄河上中流域で流行していた黒色膠状物質は発見されていない。象嵌は粘着ではなく嵌め込みで、トルコ石が骨器や玉器に嵌め込まれている。骨片を繋ぎ合わせた腕輪も孔を利用して紐で繋ぎ合わせたもので、象嵌技術の地域間差異が明らかである。

新石器時代後期にこうしたトルコ石象嵌技術が流行した後、初期青銅器時代でも継続して技術革新や多様な応用に尽力していたことは驚くべきことではない。中国ではじめての王朝国家の首都であると考えられている二里頭遺跡は、トルコ石製品の集大成ともなるもので、初めて祭祀用品である青銅牌飾上にトルコ石象嵌が認められた。続けてトルコ石象嵌の龍形器も発見され、トルコ石象嵌は最高潮に達する。象嵌技術には、すでに青銅牌飾のような嵌め込みや龍形器のような貼り付けがあり、同遺跡宮殿付近ではトルコ石の製作工房が発見されており、今

のところ知る限りでは、中国で発見された唯一のトルコ石製作工房となる。トルコ石と象嵌技術は、この最初の王朝国家形成過程において、実に多くの重要なことを我々に考えさせる。そしてこの他注目しなければならないことは、北方地区に位置するBC2000年の大甸子墓地であろう。つまり、大甸子墓地は二里頭遺跡と同一時期に存在し、大量の貴族墓葬からはトルコ石象嵌された漆器、木器や土器などが発見されており、保存状態が悪いため、すべての象嵌技術の状況を確認することはできないが、ここでの象嵌は粘着剤が使用されていたことは、僅かではあるが確認できる。報告書には、象嵌用のトルコ石片には、一面は光沢があるものの、もう一面は粗雑であり、黒色膠状物質、赤色塗料或いは漆膜が見られるとあり、これらはおそらく使用された粘着剤の一種であることから、こうした情報は研究に値する。

骨器の象嵌、土器の象嵌、玉石器の象嵌から、後の青銅器へのトルコ石象嵌広く流行した事実は、おそらくトルコ石の自然特性と特色ある色合いと密接な関係がある。我々が注目するのは、トルコ石象嵌装飾品との共伴遺物もまた特殊であるということである。常に見られる組み合わせとしては、赤色瑪瑙珠と白色海貝であり、特に初期青銅器時代では、大変規律のある共伴関係であった。緑、赤、白という三色の選択、また黒色膠状物質の色彩の組み合わせは、おそらくこの時期の人々に流行った審美観であろう。但し、より重要なことは、やはりこれらの原料の産地と消費地との相互関係を考える必要があるということである。つまり、この三種の原材料はすべて、すぐに手に入る一般的な資源ではなく、ある特定の地域で生産されるものであるということである。今のところ知られている最も古い瑪瑙珠は、西北地区の馬家窯文化半山類型の宗日遺跡であり、ここでは47点の赤色瑪瑙珠が発見されている。そして、海貝で最も古いのは馬廠類型の甘肅省蘭州市紅古下海石遺跡M3出土の海貝とトルコ石のネックレスである。下斬墓地でも2枚の海貝が出土しており、次の齐家文化の遺跡でも発見されている。大甸子墓地では、17基の墓葬から213点の瑪瑙珠と



Source: Shanghai Museum



Source: National Museum in Beijing



Source: Shanghai Museum



Source: Shanghai Museum

図51 青銅器時代のトルコ石象嵌

穿孔された貝殻695点が、13基の墓葬から14点のトルコ石象嵌の漆器が発見されている⁶⁸。

以上のように、こうした考古学的現象が明らかにすることは、トルコ石象嵌、瑪瑙珠と海貝の出土地域もまたほぼ一致しており、流行する時期も大変似通っている。これは偶然などではなく、要因があるのである。この象嵌技術はそのあと青銅時代にも継続して西周時代と春秋、戦国時代までに流行してきた（図51）。

⁶⁸ Jessica Rawson, Carnelian Beads, Animal Figures and Exotic Vessels: Traces of Contact between the Chinese States and Inner Asia, c.1000-650BC, Archaeology in China, vol.1.Bridging Eurasia, 2010, P.1-42.黄翠梅「功能と源流—二里頭文化象嵌緑松石銅飾品研究」『故宫學術季刊』第三十三号第1期 P.97-127。